ボクとイグチと野球とウタと

藤本　尚道

Masamicni Fujimoto

まえがき

井口寛司先生（以下「井口君」と呼ばせて戴きます）が、令和４年７月３日に逝去されました。そこから数えるとそれなりの時間が経過していますし、その間、同年８月 24 日に開催された「お別れの会」にも出席させて戴きました。しかし、それでも、いまだに信じられない思いでいっぱいというのが正直な気持ちです。

井口君は、むちゃくちゃ格好が良くて、賢くて、優しくて、楽しくて、オチャメで、そのくせ真面目で、まっすぐで、がんばり屋さんで、だけどお酒を飲むと唯々おもろいおっさんになる、ホントに不思議な人でした。

そして、私の生涯で間違いなく一番大好きな友人です。彼を失ったダメージは、ボディブローのように、日に日に私の心身に食い込んで来ますが、まあ、こればかりは仕方がないと思って向かい合ってきました。

思い出は走馬灯のように…という表現があります。

しかし、私にとって、井口君との思い出はそんな感じではありません。私の頭の中の「引き出し」は、どこを開けても、もう「井口君だらけ」であり、まるで「おもちゃ箱」をひっくり返したような状況です。つまりは私自身の人生において、それだけ井口君との関係性が深く、密度が濃いということであり、これをどこからどのように整理するべきか、本当に悩ましいほどです。

上記「お別れの会」では、「惜別の辞」として、井口君との思い出を述べさせて戴く機会を得ました。ただ、当然のことながら限られた時間内でのことであり、また 500 人を超える参列者の皆様方の貴重なお時間を頂戴する関係上、私自身

の思い入れをあれこれ多岐に渡って詳しくお話しをするわけにもいきません。

ですから「おもちゃ箱」をひっくり返したような状況は現在も続いています。これらを多少は整理して、私の頭の中の「引き出し」にせめて「見出し」（インデックス）くらいは付けておかないといけません。

近い将来、これらの「引き出し」が錆び付いてしまってまったく開かなくなることも十分あり得ますし、また、意外と早く私自身が「井口君のところ」に行ってしまう可能性だって少なくないからです。

それで、早い時期に私の頭の中を整理すべく、この本を書かせて戴くことにしました。

本当は、たくさんの皆さん方からお話を伺って、私の記憶をきちんと整理のうえ検証し、その正確性を担保してから…とも思いましたが、そうすると、いったい、いつ書けることやらわかりませんので、そこはもう「えいやぁ！」と書き始めた次第です。

さて、人と人との出会いはけっして偶然ではないと思います。「袖振り合うも他生の縁」という格言が示すとおりお互いに何らかのご縁があっての「出会い」です。

もっと理屈っぽく言うと、我々の世界は時間軸と空間軸との交差によって成立しているところ、時間軸あるいは空間軸がほんの僅かでもずれた場合には「出会い」そのものが実現しません。たとえば、同じ時間に神戸の街を歩いていたとしても、道一つ隔てておれば会うことが出来ませんし、同じ道を歩いていても時間が少しでもずれてしまえばやはり会うことが出来ません。

したがって、お互いに出会えているだけで、一つの「奇跡」

ではないかと私は思うわけです。私にとって井口君という本当に素敵な友人と出会えた「奇跡」に対しては、たいへん大きな感謝の思いがあります。

この本は、自分自身の人生と、そこで出会えた井口君のことをまさに好き勝手に書き綴るものです。まあ、いろいろと記憶がぶっ飛んでいる部分や、そもそもの記憶間違い、時系列の混乱なども結構あると思われますが、この本を書き進めて行くうち、少しは整理されるんじゃないか…などと楽観的に構えております。

上記のとおり私自身の頭の中を整理する目的で書き始めたものですから、基本的には自分の記憶を優先することとし、身近にあってすぐ調べられる記録以外はあえて参照しないこととします。そのため、多少の（いや、多大なる？）「事実誤認」や「経験則違背」なんぞが発生するするかも知れませんが、そのあたりはどうぞおゆるし願いたいところです。

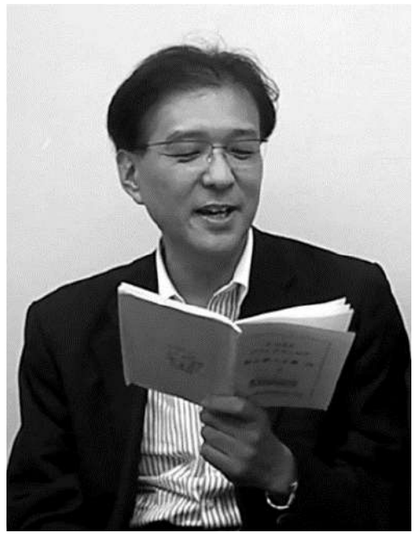
また、思い出したことは、早いうちに書き留めておかないと、どんどん彼方へと飛んで行ってしまいます。その意味では、お話しがあちらこちらに飛ぶこともご容赦ください。

なお、基本的に「敬称」の使用なども工工加減になりがちな私でありますが、そこのところもどうぞ広く大きな心で「お見逃し」くだされば幸いです。

目　次

＊井口寛司君との出会い……１
＊私にとっての野球……４
＊広報委員会にて……６
＊弁護士と演劇……８
＊丸刈りシンポ「先生、なんであかんの？」……１０
＊民暴ビデオでの大活躍……１３
＊ひまわり・こまわりの誕生……１５
＊井口軍曹と藤本二等兵……２１
＊師弟愛のお話……２３
＊夢の全国大会……２５
＊平塚球場への道……２８
＊神戸での全国大会……３１
＊阪神淡路大震災……３５
＊井口選手のレーザービーム……３８
＊続・鬼軍曹と二等兵……４０
＊雌伏の時代……４３
＊お仕事の話……４５
＊ロサンゼルスにて……４６
＊なおことナオコ……５０
＊家族のこと……５２
＊二匹めの泥鰌（どじょう）……５５
＊得手・不得手……５９
＊村田兆治氏との出会い……６０
＊但馬ドーム決戦！……６２
＊球史に残る名古屋ドーム横浜戦！……６５
＊名捕手・井口寛司の誕生……６８

＊優しい言葉……７１
＊裁判傍聴の話……７２
＊Ｄブロックから埼玉・西武ドームへ……７４
＊札幌ドーム大会で準決勝進出！……７６
＊大阪ドーム大会で因縁の対決！……７７
＊「西日本に１つの枠」（北九州大会への道）……７９
＊井口寛司選手の「予告引退」……８２
＊最後の大阪戦……８４
＊井口君引退の余波……８５
＊マスターズ大会の発足……８７
＊ひまわり・こまわり再び……８９
＊スペイン・ポルトガルの旅……９１
＊バルセロナに異変が？……９４
＊サグラダファミリア……９５
＊Roca MOO（ロカ・モー）……100
＊レンフェ（Renfe）の旅……102
＊スペイン・ポルトガルの思い出……102
＊マスターズにチームで参加……104



井口寛司君との出会い

井口寛司君と初めて出会ったのが、いつ、どのような機会であったか、正直言うと思い出せない。

先般、私が編纂を担当した兵庫県弁護士会の「125 年会史」ですら、過去２５年間の範囲を調査・執筆対象とすればよかったが、井口君との出会いはさらに１０年を加えた３５年も以前のことである。

昭和６２年（1987 年）４月１日をもって第 41 期司法修習生に採用された井口君は、同年８月１日、神戸に赴任した。約４か月の前期修習を東京・湯島の司法研修所で終え、実務修習地である神戸地裁・神戸地検・神戸弁護士会（当時）に配属されたのだ。私は第３８期司法修習生であり井口君の３期先輩にあたるが、当時は修習制度が２年だったので、井口君との出会いは私が弁護士になってまだ２年目の頃になる。

当時、修習生は、実務修習地において１年４か月を過ごすのが通例で、修習のスケジュールは比較的ゆったりしていたし、修習内容もバラエティに富んでいた。何より修習生の人数が少なかった（１期あたり 20 名程度だった）こともあって、修習生は先輩法曹から歓迎され、たいへん大事にされた。私の修習生時代を思い起こしても本当にありがたいことだらけだった。

さて、井口修習生との「出会い」の場としてまず考えられるのは、昭和６２年１０月に開催された神戸弁護士会恒例のソフトボール大会である。当時、弁護士会では、秋の大運動会とソフトボール大会が交互に開催されており、昭和６２年はソフトボールの年であった。運動会でもソフトボールでも、弁護士だけでなく修習生や事務職員の皆さん方が多数参加し

てくれた。

「もしやその中に、昼間別れた蕎麦屋がおりはせぬか、名前はなんと今一度」というわけであるが、私はソフトボール大会の実行委員であり、所属チームの一員として試合に出場する必要もあったため、諸事忙殺された記憶ばかりで、井口君と出会った具体的な記憶はないのだ。そんなわけで、**「橋のたもとで石突ついて槍の玄蕃は仁王立ち」**してしまうのだ（三波春夫：「俵星玄蕃」より）。

ただ、遅くとも昭和６３年（1988 年）６月に開催された法曹野球大会では井口君と出会っている。神戸の法曹野球は、裁判官・検察官・弁護士の３チームに加え、毎年修習生チームが編成された。

しかし、昭和６２年度の法曹野球大会は、前年度に引き続き雨天中止となったので、井口修習生の法曹野球での活躍は、昭和６３年６月まで待たねばならなかった。振り返れば、私にとっても、弁護士登録して初めての法曹野球が、ようやくこのときに開催されたことになる。

この大会における弁護士チーム（神戸ローヤーズ）の活躍については記録が乏しく、第２試合で裁判官チームに「８対２」で快勝した旨の記載はあるけれども、修習生チームとの第１試合については、「慣らし運転」とか「身体がほぐれた」といった、ホントに曖昧な記載があるだけである。

しかし、修習生チームの中に「本格派選手」が２～３人いたため、たいへん手強かったことが私自身の記憶に強く残っている。その「本格派選手」の１人が井口君だったのだ。

井口修習生は、とにかく格好が良かった。グランドに立ってプレーする井口君は本当に「E」（カッコい～！）のである。野球は、不思議なことに、きちんとしたプレーが出来たとき

こそ一番格好が良く見える。だから格好が良いのは、まさに野球が上手い証拠なのである。

そう、論より証拠。井口君の写真を見て戴ければ、その「E」ところがよくわかって戴けると思う。

私にとっての野球

余談になるが、事実を正しく理解して戴くため、ここで少し「私にとっての野球」について話しておこう。

子どものころは、よく近所の空き地に集まって野球をした。チーム分けはキャプテン同士がジャンケンをして順番に選手を取り合った。偶数なら割り切れるが、奇数で残り１人になった場合、「要るか要らんかジャンケンポン！」の決戦になり、勝った方が高らかに「要らん！」と宣言してチーム分けが終わる。私はたいてい最後のジャンケンに負けたキャプテン側のチームに入った。まあ、「ドラえもん」なら「のび太」の役回りだ。

小６のとき、野球部に入部するチャンスを得た。それまでは入部テストに合格した５・６年生の「精鋭」しか野球部に入部できなかったが、入部テストに不合格となった者にも道が開けた。５・６年混成のＢチームが出来たからである。Ａチームは６年生の、Ｃチームは５年生の、それぞれ入部テストに合格した「精鋭」だけで構成されたが、新Ｂチームには誰でも入ることが出来た。

私はＢチームの、しかも補欠であった。なお、同級生でＡチームの主将だった上野克二君（故人）は、市立神港高を経てドラフト 1976 年（昭和５１年）第６位ながら当時の南海ホークスに入団しているから、うちの小学校野球部 OB も捨てたものではない。

さて、私が公式試合に出場したのは６年生の「夏の大会」のみ。一回戦で２７対２という大差で敗退した苦い思い出である。この試合では、１回だけ出塁したものの盗塁に失敗したため２塁ベースを踏んだ記録はない。守備では外野手だっ

たが、それは内野手としての素質がなかったから…だけの話である。

そんなわけで、私の「野球の実力」は容易にご理解ご想像戴けると思う。それでも巷間「下手の横好き」と言われるよう、いかに「エラーの迷手」であり、三振の山を築くばかりであろうとも、私は野球が大好きだった。

ただ、中学・高校ではさすがに野球部に入ることはなかった。六甲高校の野球部は軟式野球のため甲子園とは無縁であったが、私の同級生たちは軟式野球の全国高等学校大会で優勝し、同年の国体でも優勝するという猛者集団だった。

なお、野球部のキャプテンだった片岡弘君とは、高校時代からともに司法試験の受験について話をしていたが、のちに私の方が一期遅れて、彼と神戸修習で再会できるとは夢にも思わなかった。

六甲高校の体育授業では、自習と称してソフトボールに興じることが多かった。私のポジションは何とまあ投手である。投手が最も守備機会が少ないと言うのがその理由であった。神戸大学時代も、六甲台グランドにおけるゼミ対抗のソフトボール大会が楽しみであった。

その後、神戸での実務修習に入った昭和５９年（1984 年）に開催された法曹野球大会では、３７期と３８期が合同で修習生チームを編成した。３７期の渡部吉泰投手と片岡弘捕手のバッテリーを主軸にしたチームであったが、バッテリーの健闘とは裏腹に、我ら３８期にはロクな選手がいなくて申し訳なかったという思いだけが記憶に残っている。

弁護士登録してすぐに「神戸ローヤーズ」に入部させて戴いた。弁護士会事務局（当時）の神谷さんからの嬉しいお誘いだった。ただ、昭和６１年度・６２年度の法曹野球は雨天

中止となったため、ローヤーズ入部後、初の法曹野球が昭和６３年６月で、その際に井口修習生の格好良さにシビレたことは前記のとおりである。

井口君が弁護士登録した平成元年（1989 年）の法曹野球は同年１１月、加古川の三菱重工グランドにおいて開催された。しかし、ローヤーズは選手９名を集めるのに「青息吐息」の状況で、私までがレギュラー出場していたのだから、チームの実力の程は明らかと言うべきだろう。この年の成績は第４位（最下位）であった。

当時、裁判官や検察官もそれぞれ野球チームを編成していた。神戸地裁管内や神戸地検管内という限られた人員による編成である。練習機会やその時間だって限られていただろうに。まあ、これはお互い様か。ただ、このような法曹野球においても勝てないローヤーズの状況が如何に悲惨であったことか。

井口君が「四番・エース」として加入し、ローヤーズにも一筋の光明がさしたが、神戸弁護士会野球部が大きく変容・発展するためには、平成３年（1991 年）の「神戸ドルフィンズ」誕生を待つ必要があった。

広報委員会にて

さて、折しも井口君が神戸弁護士会に入会した平成元年４月から、模泰吉広報委員長の号令のもと、神戸弁護士会「会報」の「大改革」が実行されようとしていた。

これまでの会報は弁護士会の活動記録としての意義はあったものの、会員の皆様になかなか読んで戴けない「積ん読」状態（今風に言えば「未読スルー」）で放置されているとの指

摘が多くあり、「それじゃあ、ここで一発ガツンと行こう！」となった次第である。

模委員長の就任により、それまでの広報委員会の雰囲気はガラリと変わった。あまり詳しいことは言いたくないが、その昔は、弁護士会の委員会などの雰囲気は本当に「暗い」ものだった。口先では「忌憚のないご意見を！」などと言いながら、実際には若手の青くさい意見なんぞ聞く耳を持たない先輩弁護士が多かった（と言えば言い過ぎか？）。

シンポジウムの準備などで若手に命じて色々と現場作業をさせておきながら、その途上、平気でケチをつけることも日常茶飯事で、「そこまで言うなら、自分でせえよ！」と言いたくなったことも多い。

いや、本当に言ったこともある。「〇〇先生がそこまでおっしゃるなら、私にはこれが限界ですので、この続きは〇〇先生ご自身にお引き受け願います」と。お～コワ～！

話が脱線した。少なくとも広報委員会では、この年度から若手の意見がどんどん受け入れられるようになって、会報の特集企画や記事内容も、これまでとは打って変わって格段に面白いものへと変容を遂げようとしていたのである。

そのような記念すべき「会報改革第一号」の特集企画として６月に開催された「広報座談会」で、井口君は正に鮮烈なデビューを飾った。

座談会は「いま、司法試験は…」をテーマに、３９期～４１期の若手弁護士に出席して戴いたもので、神戸弁護士会会報の 162 号（平成元年９月発行）の「特集」として掲載された。誌上では若手弁護士の発言は匿名の形になっているが、広報委員の私は座談会に出席していたので、井口君が何を話したか概ね憶えている。それだけこの座談会で井口君が語ったことのインパクトは強かったのである。このたび、この「座談会」の記事を読み直してみたが、私が記憶する井口君が間違いなくそこにいることにホッとした。

井口君は、当時の司法試験が抱える問題点や、任官者（特に検察官）の減少の原因及びその対策等々について明確に自身の意見を述べている。井口君の具体的な指摘や分析は、３０数年を経た現在から振り返ってみても、なお色褪せない力強さと説得力を持っている。

匿名座談会だとは言え、自分自身の意見をここまで堂々と述べることは井口君にとっても難しかったのではなかろうか。目の前には当時の弁護士会長ばかりか、「ボス弁」である広報委員長もおられたのだから。

私には井口君がたいへん格好良く、また頼もしく感じられた。野球でも「E」し、しゃべらせても「E」のである。これこそ「文武両道」を地で行く…といえば大袈裟か。それでも、私が井口君の「大ファン」になってしまったのは正にこのときであった。

弁護士と演劇

最近は、各地の弁護士会のシンポジウムなどで弁護士による演劇などが上演されることも珍しくなくなった。しかし、まだ平成の声を聞いたばかりの時代には、弁護士が演劇なんぞをやるという発想はなかったのである。

私にとっての転機は、平成元年３月に少年問題対策委員会（野口善國委員長）が中心となって開催されたシンポジウムで上演された「明日を信じて」という構成劇であった。少年審判及び付添人活動という結構重いテーマで、しかも、私自

身が演じたのは少年審判官（裁判官）という難しい役回りである。

実を言うと、私はこの役を演じる中でたいへん大きな感動を覚えた。たくさんの人間が一致協力し、膨大な時間をかけて一つの演目を仕上げ、これを観客の皆様にご覧いただくこと。そんな貴重な経験は、私の人生において初めてのことだったからである。

ただ、ここからが私の「凡人」ではなく「奇人・変人」たる所以であるのだが、これ以降シリアスな演劇への出演は「断固お断り申し上げよう」と心に決めたのであった。それは何故かと言うと、シリアスな演劇は本当にキツイからだ。肩が凝るのだ。準備に時間が掛かるだけではなく、けっして失敗が許されない。これって本職の弁護士の仕事と一緒じゃん！

何か、そうじゃない別の方法で観客の皆様方に「大切なテーマ」をお伝えすることが出来ないか。そんなことをあれこれと考え、私はついに「お笑い」へと走ることになる。

平成元年４月、生田文化会館大ホールにて上演した「塀の中はパラダイス？～拘禁二法をぶっとばせ！～」の構想・脚本・演出を担当した私自身が言うのも恐縮だが、この演劇はたいへん好評でまさに大成功であった。

成功の秘訣はひとえにキャスティングである。やくざ役の模泰吉、刑事役の石井嘉門・玉田誠、弁護人役の羽尾良三、看守役の前哲夫、被疑者役の戎正晴、鑑識係員役の羽柴修の全弁護士オールスターキャスト。このキャスティングを得たことで、もう成功は見えていた。正直に言うと、キャスティングが先で、台本は後から出来たのである。ストーリーやセリフを紡ぎ出すという脚本家の仕事の中で、役者の顔が見えているという事実は、どれだけ大きな助けになることか。キャスティングが決まっている場合と、そうでない場合とでは、台本の出来上がりのスピードが３倍以上は違う…などと申し上げたら信じて戴けるだろうか。

さて、井口君はと言えば、当然ながらこの「塀パラ」を見に来てくれて、腹の皮がよじれるほど笑ってくれた…はずである（実際のところは未確認なのだが）。

「超」がつくほどにブッ飛んだ「喜劇」の大舞台にボス弁と兄弁が「そろい踏み」するのであるから、井口君が見に来ない理由が考えられないではないか！

そして、この後いよいよ、井口君も、平成２年２月の丸刈りシンポ構成劇「先生、なんであかんの？」や、同年５月制作の「民暴ビデオ」など、「弁護士劇」の大きな「潮流」に巻き込まれて行ってしまうのである。

丸刈りシンポ「先生、なんであかんの？」

神戸市内の男子中学生は丸刈りが当たり前であった。私の母校である六甲中も然りで、神戸市内において丸刈りでなかったのは灘中くらいしか記憶がない。

自分の能力では手が届かない対象を貶めることを「酸っぱい葡萄」と言う。イソップ寓話で狐が「あんなもの、どうせ酸っぱくて食えないに決まっている」などと負け惜しみを言ったことに由来する。

私たちにとって「長髪」こそ「酸っぱい葡萄」であった。「男らしくない」「不衛生だ」「学生の本分を忘れるなかれ」などと言っては「長髪」を貶め、「丸刈り」こそ価値があるなどと「正当化」したものだ。

これは、現代の「高校野球児」にも通じる。甲子園に出場

する強豪校で、野球部員に長髪（と言っても「巨人の星」の「花形満」ほどではないのだが）を容認する高校は１割未満に過ぎないとか。甲子園に出場する球児の９割以上が丸刈りなのだ。そこでも「男らしさ」「球児の伝統」「野球に専念」などのノスタルジックな言葉が、あたかも大切な文化であるかのように語られる。

最近は、髪型が自由なサッカー部との対比で、野球部の丸刈り強制がイヤとの理由から野球部に入らない生徒・子ども達も多いらしい。そんな野球離れの対策として高校野球で丸刈り強制をやめた強豪校もあると聞くのだが、そうすると逆に「お前ら、長髪の奴らに負けて悔しくないのか！」などというヘンテコな論理が登場してしまうから、どうにもこうにも始末が悪い。

さて、何故、男子中学生は丸刈りでなければならないのか。３０数年前に、この質問をあちらこちらの学校関係者にぶつけてみたが、何処のどなたに伺ってみても「なるほど」という回答は得られなかった。要は、男子中学生に丸刈りを強制すべき合理的な理由なんぞ何処にもなかったのである。

それで、わが神戸弁護士会は平成２年（1990 年）２月に「丸刈りシンポ」を開催して「中学生の人権」を取り上げたわけで、そこで演じられたのが構成劇「先生、なんであかんの？」であった。

井口君は、東京から神戸に転校してきた中学生の役であるが、長髪のため丸刈りの級友たちに囲まれて「浮いてしまう存在」として登場した。クラスメート役に石井嘉門、上谷佳宏、三原敦子、玉田誠の４弁護士を、教師役に滝本正彦、春名一典の２弁護士を配し、井口君を含めた「黄金の７人」が舞台を盛り上げた。

先輩方に囲まれて初舞台を踏んだ新人の井口君は、設定上「東京からの転校生」であるため、「東京弁」らしくセリフをしゃべらなくてはならないことが辛かったようだ。井口君は中央大学の出身で、東京暮らしも経験しているのだから、多少は「東京弁」みたいなシャベリも得意だろうと踏んでいたが、こればかりは間違いであった。彼は和歌山県出身のバリバリの関西人なのだ。地方から東京へ出て行く若者は「故郷（ふるさと）なまり」を隠したがるものだが、関西人の多くは関西弁で押し通すことが平気なのだ。だから、ちょっとやそっとの期間では「東京弁」をマスターすることなどできっこない。

また、井口君はむちゃくちゃ「ゲラ」（笑い上戸）であった。前作「塀パラ」で味をしめている、いや失敬、腕を上げている石井・玉田の両先輩のアドリブが井口君を直撃し、笑いが止まらなくなって稽古が中断したこともしばしばであった。

もし仮に、井口君が笑いを取っても構わない役柄であったならば、きっと「アドリブ返し」をしていたことであろう。これより随分と後のことであるが、井口君から「漫才コンビ『中川家』のお二人が大好きだ」と聞いた。その理由は、台本どおりの漫才進行にこだわらず、アドリブで展開を次々に変えて行く面白さと、演者自身が自分たちのアドリブやノリ、ツッコミを楽しんでいる（演じながら自分らでウケて、ついつい笑ってしまう）点にあるとのことであった。

だから、この演劇でもたぶん「アドリブ返し」をしたかったであろうが、悲しいかな井口君は「いじめられ役」であったため、一方通行のギャグにじっと耐えるほかはなかったのである。

なお、本番では唇を噛みしめて必死に笑いをこらえたと言

う。ただし、井口君の唇に血が滲んでいたという「目撃談」は聞いていない。

民暴ビデオでの大活躍

丸刈り劇の成功で気を良くしたのかどうかはわからないけれど、引き続いての「民暴ビデオ」の出演も井口君は快諾してくれた。

平成２年（1990 年）６月に民事介入暴力対策神戸大会が開催されることとなり、パネルディスカションの題材として、いつもの演劇はどうかという話が持ち上がった。しかし、今回は日弁連の民暴委員会創立１０周年の記念大会ということで、会場はあの神戸国際会館。我々がこれまで演劇を上演してきたのはせいぜい 200 名の観客が相手であり、舞台や観客席の規模がまったく違う。観客 2000 名超の大舞台ともなると、音響にしても今までのように「マイク無しの生声」というワケにはいかず、演者一人一人にワイヤレス・マイクが必要となる。そうすると、たくさんのマイクのオン・オフや音量調整などの細かい調整を行うプロフェッショナルの助力が必要で、その場合、演劇の進行や場面の転換などのすべてについて理解・記憶しておいてもらうことが必要になる。いや、マイクだけじゃなく、照明も…と、まあ、一言で言うなら、お金と時間がムッチャかかるのだ。

それならビデオ制作はどう？と発案したのが石井嘉門弁護士。どうやら、日弁連から出る予算が 100 万円あって、撮影・編集はプロが予算内でやってくれるので、脚本家と役者さえ揃えばＯＫ…とか。もちろん脚本家と役者は「在庫」があるので、とんとん拍子に話が進んだ。

脚本２本は数時間で私が書いた。書いたと言うよりは降りてきたようなものだった。井口君と私が敬愛する「さだまさし」師は、「無縁坂」「哀しきマリオネット」「縁切寺」「雲にらくがき」「１９才」「フレディもしくは三教街」の６曲を一晩で一気に書き上げたが、その際に「ミューズが降臨」したそうである。

「ミューズ」はミュージック、ミュージアムの語源となった女神の総称とされ、現在では詩や音楽の神とされているが、古くは歴史や天文学をも含む学芸一般を司る女神であった。ミューズは９人で構成され、喜劇を司る「タリア」という女神もいるそうなので、私のところにもミューズが降臨してくれたのだろう（笑）。

役者のキャスティングはあっと言う間に決まった。井口君は、第二話「黒き手のスナイパー～あなたの会社も狙われている～」における企業恐喝グループの一番下っ端、要するにチンピラ役である。

出番もセリフもそんなに多くはない。某会社の受付で、「お約束は？」と尋ねる受付嬢に対し「さっさと呼ばんかい！」と一喝したり、うだうだと弁解する担当部長の頭上から「じゃかぁ～しぃ！」と怒鳴ったりするのが主な出番であった。

しかし、井口君はこのチンピラ役に結構「気合」を入れて取り組んだ。ちょっとガラが悪いお兄さんが好みそうな黒っぽいシャツをわざわざ大阪まで買いに行き、撮影３日前から不精ヒゲを伸ばしたのである。

受付シーンの撮影直後、受付嬢役であった弁護士会事務局（当時）の大久保千鶴子さんが泣いていた。井口君がめちゃくちゃ怖かったそうな。「泣くことはないよぉ」と私が慰めても「井口センセは、きっと私のことキライなんだわ！」とメ

ソメソ。たしかに、テイク１よりテイク２の方が「さっさと呼ばんかい！」という井口君の一喝はドスがきいていて怖かったなぁ。大久保さん、可哀そうだったね、ごめんなさい。

頭の上から井口君に「じゃかぁ～しぃ！」と怒鳴られる部長役は羽尾良三弁護士。テイク１では「じゃかぁ～しぃ！」と井口君に怒鳴られた直後、部長役のセリフが完全に頭から飛んでしまった。井口君のすごい迫力に負けたんだよねぇ。井口君はニンマリ、撮影スタッフ一同は大爆笑であった。

余談であるが、この民暴ビデオは結構好評を博した。民暴大会の直後には、テレビや新聞などで広く紹介され、英字新聞の「The Japan Times（ジャパンタイムス）」にも写真入りで掲載された。

特筆すべきは、伊丹十三プロから問い合わせを受け、民暴ビデオを提供（送付）した事実である。その２年後（1992年）には、伊丹十三氏の脚本・監督による「ミンボーの女」が公開されるのだから。

井口君の「さっさと呼ばんかい！」「じゃかぁ～しぃ！」が伊丹十三監督の目に留まったかどうかは、残念ながら定かでない。

ひまわり・こまわりの誕生

平成２年は忙しい年だった。２月には丸刈り劇、５月には民暴ビデオの制作、そして７月には井口君と私の漫才ユニット「橘亭ひまわり・こまわり」が誕生し、１０月の市民法律講座（高座？）へとつながる。

なぜ二人で漫才をすることになったかについては、少し微妙な問題がある。実は「政治」が絡んでいるのだ（笑）。とある国会議員の友人であるK弁護士から「当該議員の後援会が主催する勉強会の講師をして欲しい」との依頼を受けた。しかし普通の講演なんぞでは面白くない。

K弁護士と色々協議した結果、当時すでにNHKで放送されていた「四角い仁鶴がま～るく収めます」という番組のパクリ、いやパロディ、もといオマージュとして、私と「相方」が漫才形式で具体的に法律問題を提起し、K弁護士がその問題を解説するというのはどうか…となったのだ。

それで、さっそく「相方」を探すことになったが、私が一番に電話をかけた相手は井口君であり、嬉しいことに彼は即座に出演を快諾してくれた。

ネタは例によってミューズが降りてきて、あっと言う間に台本が出来た。ここに「ひまわり・こまわり」が誕生したのである。「ひまわり」の名は弁護士バッジから、「こまわり」の名は漫画本から拝借した。どうせなら「亭号」も付けようということで、弁護士会館の住所「橘通」をもじって「橘亭」とした。どっちが「ひまわり」で、どっちが「こまわり」か…の説明は不要だろう。

このときのネタは、ワードではなくオアシスで作ったという「時代的背景」があるため、データとしては残っていない。しかもネタはミューズが降臨して出来た（笑）ので、記憶も定かではない。一生懸命探したら、この度、なんと３２年前の台本の現物が出てきた！

井口　ちょっと、これ見てくれるか（手紙のようなものを見せる）。
藤本　どないしたんや（手にとって見る）。
　　ふむふむ…。なるほど、なるほど。

井口　わかるか？
藤本　さっぱり。
井口　しっかり見てぇな。
藤本　え～と…わしのいさはみなおまにやる…てか？
　　これ、なんやねん？
井口　じいちゃんの遺書やがな。
藤本　遺書て、おまえのじいちゃんまだ元気でピンピンしとるで。 今朝かて、横町（よこまち）の風呂屋で会うたがな。
井口　そうそう、うちのじいちゃん、朝風呂が好きで。やっぱり糠袋であたまテカテカにこすっとったか？
藤本　糠袋て、あの座布団みたいに大きな袋かいな。
井口　うちのじいちゃん愛用の糠袋や。
藤本　風呂屋のおっさんも、えらい迷惑やな。
井口　うちのじいちゃん、あの特大糠袋が健康の秘訣や言うてなあ。百まで生きるつもりやで。
藤本　ほんなら、その元気なじいちゃんが、何で遺書なんか書かなあかんねん？
井口　おまえ、遅れとるなあ。
　　このごろは、みんな遺書を書いてるで。
　　あとあと「財産分け」でもめへんように…て。
藤本　それも言うなら「遺言」やろ？
井口　あ、そういう言い方もあるか。
藤本　遺書と遺言じゃ大違いや。
井口　どう違うねん。
藤本　遺書ゆうたら「わしが死んだら、ああしてくれ、こうしてくれ」とか「わしは今まで黙ってたけど、実はあれは…」とかやな、主に自分の気持ちとか希望

とかを書くもんや。
　　遺言ゆうたら、「この財産は誰にやる」とか「誰だれはわしの実の子どもやから認知する」とかやな、主に財産の相続とか身分関係のことについての意思（遺志）を明確にしておく、れっきとした法律上の行為やがな。
井口　いや～、よく御存知ですねえ…。
藤本　ええ、私らそこのもんですわ。ど～も、ど～も。
井口　それ「いずもや」のコマーシャルやがな。
藤本　おまえが先にネタ振ってるんやんか。
井口　ところで、この遺書な…。
藤本　遺言！
井口　そうそう遺言。この遺言、法律上有効やろか。
藤本　そら難しいなあ。もっぺん読んでみるわな。
　　え～と…わしのいさはみなおまにやる…て？
　　どういうこっちゃ。
井口　「わしの遺産はみなお前にやる」って書いてくれたんや。
藤本　え～…わしのいさはみなおまにやる…としか読めんで。
井口　「遺産」の「ん」と、「お前」の「え」が、抜けとるねん。
藤本　そんな大事なもん抜いてもらいなさんな。
井口　ほな、そこだけ僕が書き加えよか。
藤本　あかん、勝手に変えたら遺言が無効になってしまうがな。
井口　えらい、難しいねんなあ。
藤本　え～と…わしのいさ（ん）は、みなおま（え）にや

る…まごのたろうへやまだごんざえもん…あきしのみやでんかごせいこんのひ…わからんな。

井口　孫の太郎へ。山田権左衛門。秋篠宮殿下ご成婚の日いうくらい、わからんか。

藤本　あ、なるほど。「孫の太郎へ」。「山田権左衛門」ゆうたら、じいちゃんの名前か。
「秋篠宮殿下ご成婚の日」ゆうたら、今年の６月２９日のことやな。それで、「山田権左衛門」の下についてる赤いポッチンは何やねん。

井口　じいちゃんの拇印や。

藤本　え、これ拇印か。何や指紋も何もわからんな。

井口　わかりにくいけど、とりあえず気持ちだけ…。

藤本　気持ちだけの拇印があるかいな。

井口　それで、この遺言、有効なんやろか？

藤本　こりゃ難しいで。弁護士の先生に聞かんと。

井口　うまい！ようやくあの先生の出番につないだ。

藤本　そらそうや。台本はここまでしかないんや。

井口　ほな、早速、弁護士の先生に聞いてみまひょか。

藤本　先生、お願いします。

というわけで、K弁護士につないで、自筆証書遺言の要件や作成において気を付けるべき点などについて解説してもらうという流れ。まるっきり NHK「生活笑百科」のパクリやね。あ～！笑福亭仁鶴師匠が懐かしい。

ところで、このネタはよく出来ている（笑）。自筆証書遺言の要件について、問題となるところが一通りピックアップされているのだ。自筆であること、日付と署名、そして押印があることなどの要件に関連して、「秋篠宮殿下ご成婚の日」（平

成２年６月２９日を指す）が自筆証書遺言の「日付」として有効か、また拇印は押印として認められるのか、自筆証書遺言の訂正方法は…といった問題点が見事に埋め込まれている。どうか、ミューズをほめてあげて欲しい（笑）。

さて、井口君が結構ゲラであることはすでに述べたが、この漫才では私の方が危なかった。井口君の「ボケ」が絶妙なのである。落語好きの方にはすでに見抜かれたかもしれないが、上記のネタの下敷きになっているのは上方落語の「三枚起請（さんまいきしょう）」である。井口君が喜六（きぃ公：江戸落語では与太郎か）で、私が清八（せいやん：喜六の兄貴分）の役どころであるが、井口君が、まさに「きぃ公」を地で行くようなボケぶりを発揮してくれたため、私は何度も吹き出しそうになって、ツッコミのタイミングを逃すところだった。あ～、ホンマに危なかった。

この「遺言ネタ」のほか、当日披露したネタは「借地借家」「訪問販売」の２つがあったが、私自身、中身を忘れている。ただ、いま読み返すと逆に新鮮で、井口君のボケには「クスリ」と笑ってしまう。

そんなわけで、この「ひま・こま」は大成功のうちに幕となり、私たちは「初漫才」で何とギャラまで頂戴した。ギャラの金額は忘れてしまったが、きちんと源泉徴収もされていたと記憶するので、議員先生の政治団体の収支報告書には載っていると思われる。ただし名目は「出演料（漫才師）」ではなく、「講師料（弁護士）」となっているはずだと思うが。

なお、当日お越しになっていた観客は女性が多かった（この議員先生が結構イケメンだったから？）のだが、皆さんは私たち「ひま・こま」のことを「本物の吉本芸人」だと思い込んでいた。司会の方から「実は、お二人とも弁護士さんな

んですよぉ」と明かされたときに起きた会場のどよめきは、むちゃくちゃ快感であった。

それでクセになったというわけでもないけれど、平成２年１０月には、弁護士会館において広報委員会が主催する「市民法律講座」に「ひま・こま」が出演する運びとなった。ネタは「騒音問題」「相隣問題」「ペットや子どもの事故」の３本が「新ネタ」として披露されているが、事前練習をする時間は殆どなかった記憶だ。１ネタ終えるたびに、舞台裏で井口君と「超高速ネタ合わせ」をしてなんとか乗り切った。

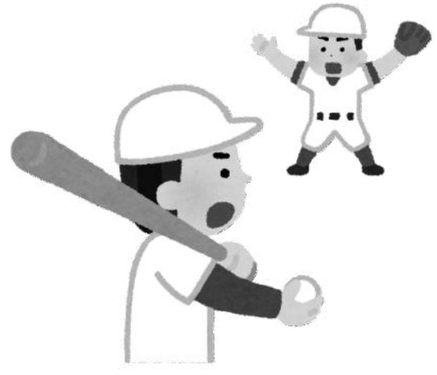
なお、解説の弁護士役としては石井嘉門弁護士に出演をお願いし、ご快諾をいただいた。

この市民法律「高座」も大成功に終わったが、やはり観客の皆さんは、私たち「ひま・こま」のことを本物の吉本芸人だと思い込んでいた。そして、「高座」が終わったあと、何人かの観客が私たちを取り囲んで「是非ともウチで公演して欲しい」などと口々に依頼してこられたのには驚いた。もちろん、いずれも丁重にお断り申し上げたのであるが。

井口軍曹と藤本二等兵

井口君が「神戸ローヤーズ」に入部し、すぐに「エースで四番」の地位を不動のものにしたことは前記のとおりである。ただ、ローヤーズは法曹野球ですら勝てない弱小チームであった。そこで井口君は、チーム底上げの手始めとして、まずは一番下手クソであった「藤本の強化」を図るべく、まさに「鬼軍曹」と化して、「藤本二等兵」に対する手厳しい指導と訓練に着手した。

キャッチボールからの指導はたいへんであったけれど（どっちが？）、何よりも嵐のようなノックは壮絶であった。しかし、これも「チーム愛」がなせる業。私は、井口君の「愛の鞭」を喜んで受け入れたのであった。



他方で、平成３年（1991 年）に幸寺覚・藤掛伸之の両選手が入部し、新しいバッテリーの誕生を契機として、井上史郎監督の号令のもと、私と井口君とで新たなチーム作りを開始することとなった。

まずはチーム名である。当時は、日本中に「ローヤーズ」があふれていた。失礼を承知で言うなら、どこを切っても「金太郎飴」という状況である。「ほんまにオシャレじゃないよなぁ」と嘆く井口君とあれこれ議論し、二人の意見が一致したのが「ドルフィンズ」であった。どこから引っ張ってきたのかは忘れたが、不思議とすぐに意見が一致した。

「じゃ、もう『ドルフィンズ』で行こう！」と逸る私を諌めて「適正手続」の必要性を説いたのは井口君であった。やはり軍曹は二等兵とは違うのだ（笑）。

そこで、野球部員全員の事務所にＦＡＸを送った。その要旨は「藤本・井口は新チーム名を『ドルフィンズ』と提案す

る。異議ある者は対案を添えて明日のＰＭ５時までにＦＡＸにて返信されたい。」であった。
　そしたら来るわ、来るわ。全部で１５もの対案が送られてきた。弁護士というのは何にでも一応「異議」を出すのが大好きな職業人なんだと改めて思い知らされた。それで仕方なく、これらの 15 案をも含めてＦＡＸ投票を実施したら、圧倒的に「ドルフィンズ」の勝利。ほっと胸をなでおろした二人であった。
　ユニフォームはオリックス・ブルーウェーブのモデルを採用し、帽子のマーク「ＫＤ」は弁護士会事務局（当時）の安西千保さんの友人が無償でデザインしてくれた。
　ドルフィンズのメンバーが増強され、チームが強くなるにつれ、当然ながら私の定位置は「ベンチ」へと移っていった。それでも井口君は私のことを気遣って「強化メニュー」は続けてくれた。マネージャーたちは「藤本二等兵がまた井口軍曹にしごかれている」などと陰で心配してくれたが、時間が経つにつれ、先輩の私が後輩の井口君を「野球のお師匠様」と慕う、変則的な友情関係も次第に理解されるようになっていった。
　おかげさまでドルフィンズはどんどん強くなり、もはや法曹野球では負けなくなった。…いや、時々は負けることもあったんだけれどね（笑）。

師弟愛のお話

　さて、何年度の法曹野球だったか、記録をたぐっても判明しないのだが、グリーンスタジアムのサブ球場で裁判官チームと対戦したときの強烈な思い出がある。

　すでに７点差でド軍がリードしていた４回か５回の表。二死走者一・三塁で、あと一人を押さえたら「コールド勝ち」となる場面であった。
　打球がショートの井口軍曹のところへ飛んだ。そのままファーストに投げても３アウトにできる状況だったが、セオリーどおりに近い方のセカンドに投げた。
　しかし、なんと二塁手は藤本二等兵。鬼軍曹の剛速球はホップして二等兵のグラブをはじき、オールセーフ、その間に三塁走者が生還。この１点でコールド勝ちが帳消しになる大ピンチ？となった。
　「あほぅ！」鬼軍曹の一喝を受けて二等兵はビビる。
　６点差で迎えたその裏、打順トップはなんと二等兵。ホントはド軍が大差で勝っているのだが、まるで負けているかのような雰囲気になってるのはなぜ？「自分のエラーは自分のバットで返せ！」と鬼軍曹。
　この厳命に二等兵は奮起し、センター前にクリーンヒットを放ったのだ。センターを守っていたのは辰巳裁判官。ところが、同裁判官の前方で大きくバウンドした打球がそのまま頭上を超えてバンザイ状態。ボールは点々とバックスクリーン方向へと転がって行く。
　二等兵は必死で走る。サードコーチャーがぐるぐると腕を回しているが、もはや体力も限界。ええい、ままよ！ 二等兵はホームベースにヘッドスライディング…と言うより、ただ倒れ込んだだけなのだが、結果はランニングホームランで見事にコールド勝ち！
　鬼軍曹は、まるで我がことのように欣喜雀躍。二等兵を抱きしめんばかりに両手を広げて迎える。二等兵の目にも光るものが…。

まことに美しい「師弟愛」なのであった。

夢の全国大会

日弁連野球全国大会が初めて開催されたのは昭和５６年（1981 年）のことで、ローヤーズの時代から全国大会への参加は意識されていたが、如何せん法曹野球ですらメンバーを揃えるのに青息吐息であったから、全国大会予選はこの１０年間「棄権」が常態であった。

しかし、ド軍が結成された平成３年（1991 年）には、ついに全国大会の予選に駒を進められる運びとなった。

初戦は岡山戦。場所は佐用郡上月町の「上月リバーサイドクラブ」附属の野球場である。残念ながらここはすでに廃業・閉鎖されてしてしまっているが、阪神淡路大震災直後の練習場所すら無い「雌伏の時代」には、本当に良くお世話になったところである。

ともかくド軍にとって初の全国大会予選である。幸寺ー藤掛のバッテリーにとっても初の公式戦であり、試合開始まではかなり緊張感があった。ところが、蓋を開けてみると幸寺の好投にナインの好守が重なり、５回までの失点はわずかに２点。対するド軍は４回まで毎回得点で１２点を叩き出し、１０点差で５回が終了したところへ突然の雷雨。のちに天気は回復したが、雨でグランドが使用不能となり、ド軍のコールド勝ちとなった。

井口君は四番レフトで出場し、毎回得点に大きく貢献した…という記憶だが、この日は六番捕手の藤掛伸之選手がレフト「柵越え」のツーランホームランを放った衝撃があまりに強すぎて、井口君を含めた他の選手の活躍振りが霞んでしまった感がある。

そして、まさに藤掛選手はこの日のＨＲを契機として、長らくド軍の四番を任されてしまう「羽目」になり、「苦難の道」を歩むこととなる。

そもそも四番打者は、四番と言うだけで相手方バッテリーにめちゃくちゃ警戒される。例えば八番や九番打者なら、そう警戒もされず、投手の手抜きや失投もあって、逆にヒッティングが楽になるという逆説的現象があるのだ。その意味で四番は本当にたいへん。これは藤掛伸之選手の口癖（弁解？）でもあった。

さて、岡山を撃破したことで、ド軍の次の対戦相手は広島チームとなった。その結果は…詳しいことは書かないでおこう。ともかくド軍は「魔物が棲む」と言われる「ひろぎんの森グランド」で広島チームに手痛いサヨナラ負けを喫した。最後の打球は、「井口のところに飛んだ」とスコアに書かれているそうな（井上監督・談）。

この敗戦が、ドルフィンズの歴史に燦然と輝く「替え歌」の原点となったわけだから、まさに「禍福は糾える縄の如し」である。井口君の悔し涙。その涙が乾く前に出来たのが**「ひろぎんの森夏景色」（津軽海峡冬景色：石川さゆり）**であった。

新神戸発の新幹線　降りたときから
広島駅は　かげろうの中

球場へ向かう　車の中は誰も無口で
F 本だけが　はしゃいでた
私もひとり　迎えの車に乗り
うだるような　外を見つめ　バテていました
あ～あ　ひろぎんの森夏景色

ごらん　あれが爲末投手　広島のエースと
羽柴助監督が　指をさす
汗でくもる　眼鏡のガラス　拭いてみたけど
はるかに　かすみ　見えるだけ
サヨナラ負けは　死んでもしたくない
敵の打った　ボールがレフトに　飛んで来ました
あ～あ　ひろぎんの森夏景色

全国大会　予選で散ったのに
帰り道の新幹線じゃ　盛り上がってました
あ～あ　ひろぎんの森夏景色
（1991/8/31　作：寛、補作：尚）

それからは、試合に勝ったと喜んでは替え歌を作り、負けたと悔しがっては替え歌を作った。野球部の忘年会では、替え歌を「歌集」にまとめて配ったりもした。

作成時期はわからないが、結構早いうちに歌集に載った替え歌として**「補欠の妻から」（北の宿から：都はるみ）**がある。私の妻が作ったものだが、「これは名作だよね」と、野球部メンバーに好評だったため、歌集に掲載された経緯がある。何よりも井口君に言及している（笑）ので、ここに紹介しておこう。

あなた出番は無いですか　日毎あせりがつのります
着ても汚れぬユニフォーム　涙こらえて洗います
女心の試練でしょう　レギュラー恋しい　補欠の妻

あなた路線を変えますか　選手めざすのあきらめて
羽柴なきあと助監督　やれば心も晴れるでしょう
女心の試練でしょう　レギュラー恨めし　補欠の妻

あなた帰っていいですか　胸がしんしん泣いてます
試合ながめてただひとり　ひとの旦那を見つめます
出来れば「井口の妻」になりたい
レギュラー恋しい　補欠の妻
（作成時期不詳　作：理　補作：尚）

確かに私は「万年補欠」で、ベンチは私と井上監督だけだったけれど、それでも私の「出番」は無かったなぁ…。

平塚球場への道

平成５年（1993 年）の全国大会予選では、とんでもないことが起きた。なんとド軍が宿敵大阪チームを破ったのである。決戦の会場は「グリーンピア三木」。しかし残念ながら、私はこの試合には出席していない。別の用事があったのだ。それは、妻が所属する女声コーラスの「ビデオ撮影係」という「大役」であった。

私だって野球部の試合は大切なのだ。けれど、妻のこの一言には負けた。「どうせ、あなたの出番はないから大丈夫よ」（確かに、確かに出番はないだろう…なぁ）。「こっちでビデ

オ撮ってくれたらみんな喜ぶよぉ！」（そりゃまあ、こちらの方が私自身の存在価値は高い）。そんなわけで私はビデオ係を仰せつかることとなった。

ところが、夕方になって井口君から電話があった。

「大阪に勝ったよぉ！」井口君の第一声は興奮に満ちていた。私はわが耳を疑ったが、構わず井口君は「なんで来なかったん！」と残念がった。聞けば、ド軍に負傷者が出たため、最後は宮崎定邦総監督までがセカンドを守ったという。つまり、私が行っておればちゃんと出場機会があったということだ。私は心底がっくりした。でも、いまさら何を言っても仕方がない。世の中ってこんなもんなんだよね…。

あとは京都戦だけだった。後日、琵琶湖大橋の近所にあった「ユアサ電池野球場」で京都戦が実施され、ド軍は無事に９対６で京都を破った。井口君の３塁打や幸寺投手の２ランＨＲなどもあり、終盤（６回裏）には、私も代打に起用してもらえた。

ただし、私の打席が公式記録として認められることはなかった。実は、すでに制限時間を超過しており、新しいイニング（７回）に入れないことが後で判明したため、遡って６回表の京都の攻撃が終わった時点で、記録上「試合終了」となったのである。私にとっては残念至極であったが、ド軍が試合に勝ち全国大会に進出できたのだから、まあエエか…と思うしかなかった。

そんな経緯で、私たちは、神奈川県の平塚球場に勇躍乗り込むこととなった。当時は、まだドルマネ（ドルフィンズ・マネージャー）がいなかったため、兼子・大久保・安西さんら弁護士会事務局の皆さんにお手伝いを戴いた。写真班として石井嘉門ド軍「準構成員」にも帯同をお願いした。ただ、

私自身は開会式に出席したのを覚えていない。当時の写真を見てもハテナ？である。補欠ながらも全国大会「初出場」に舞い上がっていたのか。

さて、札幌戦は８対１の大差で敗退し、ド軍の「夏」は終わった。全国大会出場チームのレベルの高さをガツンと思い知らされたが、もう一人ガツンと痛い目にあった選手がいる。幸寺投手のセカンド牽制球を捕り損ね、こともあろうにオデコで受けてしまったＤ先輩である。

そもそもファースト牽制はランナーの足止めが第一目的であるが、セカンド牽制は「殺す」のが目的である。投手にとって、得点圏走者に後ろをチョロチョロされるのは心底許し難いのだ。だからセカンド牽制で投手は渾身の速球で「殺し」にかかる。この場合、ボールがグラブの手前で意外とホップすることが多い。以前、ショートの鬼軍曹が投げた球をセカンドの二等兵がはじいた話をしたが、これも同じく「ホップ」の現象による。

だから、気の毒なＤ先輩は、これまでこんな速い牽制球を受けた経験がなかっただけのこと。本当に怪我をされなくてよかったと思う次第。

さて、私たちは全国大会名物の「懇親会」にも出席させて戴いたが、何を見ても聞いても「初めて」のことだらけであった。本当にただの「お客様」状態のまま「牛飲馬食」にのみ徹し、翌日は準決勝・決勝の行方を見守ることもなく、そそくさと帰神したのであった。

実は、この時点で、翌年（平成６年）の全国大会がグリーンスタジアム神戸で開催されることが、同日に開かれた連盟理事会で決せられたはずである。また、懇親会においてもその旨が発表されたはずである。しかし、私は何も覚えていな

い。やはり、この当時の私は「万年補欠」に過ぎず、選手として半人前以下であったばかりか、チームの運営に心を砕いたり、雑用をこなしたりするようなこともまだまだ出来てなかったことがよくわかる。

たぶん、井上史郎監督、羽柴修助監督は、当然ながら翌年の神戸大会のことで、すでに頭がいっぱいであったろうが、私がベンチワークのスキルをアップさせて行くのはもう少し先のことになる。

神戸での全国大会

平成６年（1994 年）１１月に、グリーンスタジアム神戸において全国大会を開催する栄誉に恵まれた。ＧＳ球場及び明石球場（予備日）の確保をめぐっては、井上監督及び羽柴助監督の並々ならぬご苦労があったようであるが、前記のとおり私はまだ「万年補欠」の座から動いてなかったので、詳しいことはわからない。

それでも、いよいよ大会が近づいてきて、全国のチームに対する案内や予選の組立、プログラムの作成などが必要になってくると私の「出番」となる。今でこそ大会プログラムはカラー印刷の豪華なものが当たり前となっているが、当時は弁護士会にある機器で印刷をお願い出来る程度の「手作り感満載」のプログラムであった。

私は裏方に徹することになったが、一つだけ、開会式での「選手宣誓」の栄誉を与えられた。今となっては、いったいどのように宣誓して「ウケ」を狙ったのか、まったく思い出せないのだけれども。

さて、同年１１月８日のド軍第一試合は、岐阜チームが相

手である。本来は名古屋チームが常勝の中部方面ブロックであったが、この年は私と同期の幅投手の大活躍で岐阜が名古屋を破ったとの記憶である。

他方、ド軍は予選を勝ち抜くことなく、「開催地枠」での全国大会出場であるから、念願の第一試合突破には懸念があった。しかし、これもやってみないとわからないもので、結果は１０対２でド軍の大勝利。この試合での井口君の活躍は替え歌「手加減しやがれ」（勝手にしやがれ：沢田研二）になっているので紹介しておこう。

３塁ベースを蹴って　ホームに駆けて行く
やっぱり おまえは狙っているんだな
悪いこと言わないからね　サードにお戻りよ
ショートの井口が　打球をつかむ
行ったキリならそのままダッシュで駆けな
戻る気になる半端がマズイよ
せめて少しは手加減しておくれ
頭をゴツンとは殴らんでくれ アアア…

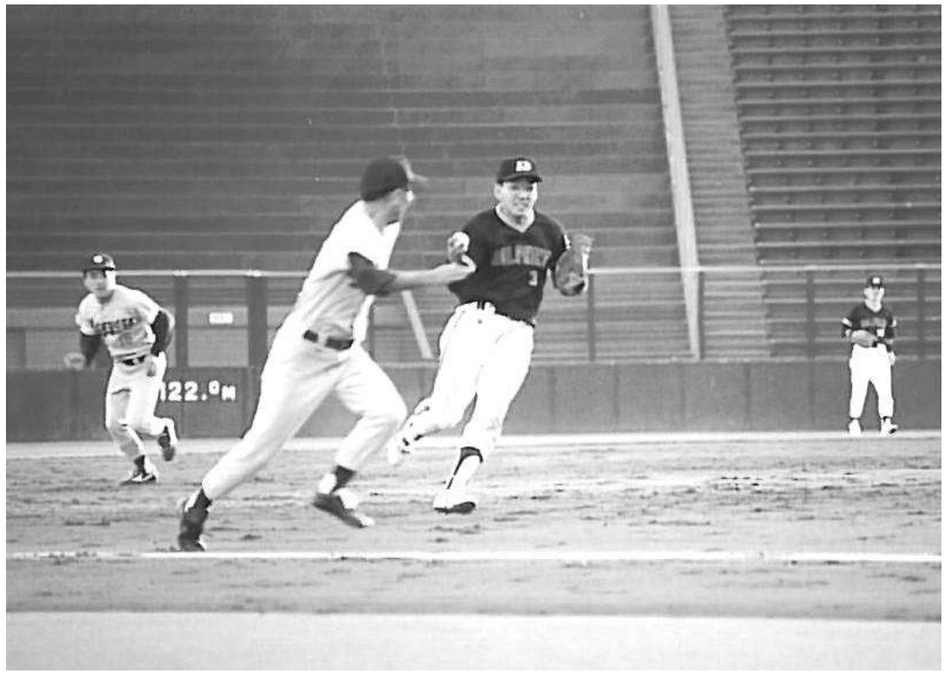
しりもちの痛みをこらえ ベンチに帰りゆく
キャッチが　やさしく一声かける
「大丈夫」と言うのも何故か　シラけた感じだし
「まあね」と　サラリと笑ってみるか
別にふざけて追っ掛けたワケじゃない
俺のこの手で殺したいだけだよ
岐阜に勝ったら次は広島戦だ
明日も頑張ろう　ワンマン・ショーで　アアア…

岐阜に勝ったら次は広島戦だ
明日も頑張ろう　ワンマン・ショーで　アアア…
（1993/11/10　作：尚、補作：寛）

少し説明が必要だろう。岐阜の三塁走者が、ショートゴロの間にホームを狙って走りかけた。しかし、井口遊撃手が打球をつかんでホームに投げる態勢に入ったため、走者はあわててサードに戻ろうとして態勢を崩す。これを見た井口君は、ボールをサードに送ることなく、そのまま走者目掛けて猛ダッシュ。ボールを持った右手で走者にタッチしてアウトを取った。本当に見事なファインプレーであったが、替え歌のとおり、井口君はつかんだボールで走者の前額部にタッチしたため、まるでオデコをゴツンと殴ったように見えた。また、三塁走者の慌てぶりと、タッチを受けて尻もちをついたシーンも少なからず滑稽で、ちょっとばかり可哀そうな光景だった。それで、ベンチに戻ろうとした走者に藤掛捕手がやさしく「大丈夫ですか」と声を掛けたというお話。井口君の「ワンマン・ショー」に、三塁走者がタジタジという対比が、観客のどよめきと失笑を誘った一幕であった。

ところで、上記替え歌の２番「**別にふざけて追っ掛けたワケじゃない　俺のこの手で殺したいだけだよ**」の部分だが、私の原案では「**別にふざけて追っ掛けたワケじゃない　暴投するのが怖かっただけだよ**」だった。ところが、井口君がこれに猛反発。「そういうネガティブな発想ではアカン。あくまで積極的な野球に徹したかったのだから、そう書いてよぉ！」とのことで、上記のとおりにまとまった次第。

ここは、その場面の井口君の雄姿をご覧戴こう。



さて、次は、広島戦である。岐阜 VS 神戸戦は大会初日の最終試合であったが、「勝てば広島」と言うのは最初から判明していたわけではない。上記替え歌はあくまで後付けである。そもそも準決勝の「組み合わせ抽選」は、夜の「懇親会」における一大イベントなのだから。

さて、懇親会には野田浩司投手（オリックス）を迎えて、羽柴助監督によるインタビュー形式で、当日の４試合について講評をお願いした。ちなみに、当時、野田浩司選手は現役の選手であり、阪神からオリックスへ移籍した１年目の平成５年（1993 年）に 17 勝をあげて最多勝を獲得したり、この年（平成６年）の８月には近鉄戦で「17 奪三振」のプロ野球タイ記録を打ち立てたりしていた第一線の大投手なのであった。

さらに、翌年（平成７年）４月には、千葉ロッテスタジアムにおいて「19 奪三振」の日本最多記録を達成する。令和４年（2022 年）４月にはロッテの佐々木朗希投手がようやく「タイ記録」に追いつくが、それまでの 27 年間、誰もが達成し得なかった大記録なのである。

オフシーズンに入っていたとはいえ、現役のプロ野球選手が、日弁連野球全国大会の講評のために丸１日野球場で我々の野球を観戦してくれたうえ、全試合について一つ一つ講評してくれたことは、たいへんありがたくも素晴らしい思い出である。

ところで、広島戦は「6 対２で惜敗した」とだけ書いておこう。残念ながら井口君のワンマン・ショーも見られなかった。ちなみに、この大会の優勝チームは広島である。ウチも優勝チームに負けたのなら仕方がない。ＧＳ紙戸に「魔物」が棲んでいるとは聞かないし…ね。

阪神淡路大震災

阪神淡路大震災（1995 年１月１７日発生）のことは、どんどん記憶が薄れていってしまっている。ヒトは不幸な出来事を早く忘れたいと思うからであろうか。

幸いなことに、神戸市西区に住んでいた我が家は大きな被害を免れた。ドンとＰ波の一撃を受けて常夜灯が消えると同時に飛び起きた私は、隣室の妻と次男（小１）の元に走った。すでにＳ波が到達し、ベッドの上で次男が揺れているのを妻が押さえていたの確認して、長男（小４）のところへ走った。その頃には地震もおさまったが、時間にして２０秒くらいだったか、揺れる船の甲板を走る感覚であった。家族で１室に

集まり、ラジオをつけた。近所の家々では、自動車のアイドリング音が聞こえ始めた。皆さん、カーラジオで情報を得ようとの考えだったのだ。

私は勝手に南海トラフ地震を想像していた。紀伊半島の南の方が壊滅的打撃を受けたのではないかと考えたのである。しかし、ラジオでは神戸市内、特に長田区を中心に立ち上る黒煙のレポートが繰り返されていた。神戸が被災したって？何処か信じられない思いだった。

ちなみに、私が寝ていた場所には、タンスの上から落下したガラスの人形ケースが粉々に割れて散っていた。私がそのままうかうかと眠っていたら、頭部に直撃を食らっていたところだ。

さて、後日、井口君から聞いた話がある。当時、井口君たち家族は阪神青木駅の近くに住んでいた。神戸市内の被災状況を踏まえ、とりあえず、幼い奈緒子ちゃんを和歌山県の実家に避難させようと考えた井口君たちは、必死のパッチでまずは大阪市内まで辿り着いた。阪神電車も地震の直撃を受けて寸断されていたから、何処をどうやって大阪まで辿り着いたのか。ともかく「這う這うの体（ほうほうのてい）」だったと聞いた。

大阪に着いて、うどん屋（か何かの飲食店）に転がり込むようにして入ったら、そこにはただの「日常」しかなかったという。「このヒトたちはどうしたの？」と言わんばかりの視線でいぶかしげに見られたことには驚いた…と、井口君は述懐している。そこで戴いたお茶が、心に沁みるほど美味しかった…とも。この逸話が象徴するように、阪神淡路大震災で大きく被災したのは限られた範囲内なのだ。まさに典型的な「直下型地震」の特徴だと言えるのだろう。

私は…と言えば、阪神淡路大震災が発生して約１週間後に弁護士会で緊急会員集会が開かれたが、ちょうど神戸市営地下鉄の一部区間（西神中央～板宿）が開通した日でもあって、私は板宿駅から弁護士会館まで往復約１０キロの道のりをテクテク歩いた。前年の１２月にホノルルマラソンに参加し５時間３０分ほどで完走したこともあって、１０キロくらいは「屁」でもないと思っていた。

ところが、板宿駅から歩き出してすぐに歩道と車道の段差を踏み外して足を痛めた。それでも会館に辿り着き、緊急集会を経て、往復１０キロを歩き通し、板宿経由で西神中央へと戻ったところで、右足がうんともすんとも動かない。自宅から自転車を持って来てもらい、それを「杖」代わりに外科へ直行すると、医師がにっこり笑って「折れてますね」だと。右足第５中足骨骨折、すなわち足の甲の小指から連なる細い骨が折れたとのこと。「まあ６週間もあれば走れるようになれますから」と真っ白い長靴みたいなギプスで固定される。

弁護士会の緊急集会で今後の法律相談態勢などを話し合ったというのに、私は動けなくなってしまった。骨折り損かとも思ったが、いや骨休めしなさいとの「天の声」だと思って自宅で療養した（涙）。

そのころ、井口君は、被災地を原付バイクで走り回っては震災後の街づくりに奔走していた。井口君は、阪神淡路大震災の前年に独立して「井口法律事務所」を立ち上げていたが、すでにマンション学会にも入っており、マンションをめぐるさまざまな問題点についても研究が進んでいた途上であった。

ちょうど良いタイミング…などと言ったらお叱りを受けるであろうが、まさに被災者の皆さんのために井口君の実力が発揮されたタイミングであったのだ。井口君は、日夜、神

戸市内を駆け巡っては、被災マンションの理事会等に参加して、震災復興に必要な相談に乗ったり助言をしたりに明け暮れていたのだった。

井口選手のレーザービーム

井口君はとにかく強肩であった。ローヤーズ時代はもちろん、ドルフィンズ発足後もマウンドに登ることが何度もあった。ローヤーズでは先発登板であったが、ドルフィンズではリリーフが多かった。それまで、ショートやセンターで走り回って、かなりバテかけた状態で「お呼び」が掛かるものだから、投手としての成績はイマイチであった。

本人も「先発やったら、もうちょっとは…」などと弁解していたが、それは私もそう思う。球は速いのだが、ストライクがなかなか入らない。どちらかと言うと、井口君の場合、センターの守備位置から投げた方が、ストライクの確率が高かったと思われるほどだ（笑）。

当時はまだ「レーザービーム」などという呼称はなかったが、イチロー選手よりも前に、井口君が鮮やかなレーザービームを何度もきめていた。ただ、捕手に転向してからは、ファーストやサードへの送球がときに野手の頭を大きく超えた。我々はこれを「井口スペシャル」と呼んで、恐れおののいた。

井口君の強肩を歌った替え歌もある。あまり披露されたことはないが、**「ヒロシ数え唄」（大ちゃん数え唄）**である。元歌はアニメ「いなかっぺ大将」（‘７０～‘７２）の主題歌で、**天童よしみ**さんが少女のころに歌っていた。

ひとつ　ひとより　肩つよい

ふたつ　ふるさと　あとにして
花の　神戸で　「登録」よ
みっつ　みんなの　アイドルだい
ヒロシは　あっちょれ　人気者
てんてん　天下の　ヒロ・イグチ

よっつ　弱気は　みせないで
いつつ　いつでも　豪速球
ちから　抜け抜け　送球は
むっつ　無理には　投げないで
サードが　おっとと　とれません
てんてん　天下の　ヒロ・イグチ

ななつ　ななクセ　悪いクセ
やっつ　やっぱり　なおらない
ここのつ　こまった　緊迫感
とうで　とうとう　ブッチ切れ
ヒロシは　瞬間湯沸器
てんてん　天下の　ヒロ・イグチ

(1998/10/23　作：尚)

かのイチロー選手は、高校時代に「イップス」を発症し、プロ野球の選手になってからも数年は苦しんだという。「イップス」の定義そのものは必ずしも定まっていないと思うが、野球を続けていると時々「イップスかい！」と思わず口にしてしまうプレーに出くわす。

投手では、ストライクが入らない、暴投癖がある、特に近いところにうまく投げられない、牽制球が暴投気味になる、

緩いボールが投げられない。捕手では、投手への返球、二塁への送球、バント処理などで暴投してしまう。また内野手・外野手では、簡単なゴロの処理やフライ捕球後の送球が暴投になったり、やはり近い距離での送球のコントロールが定まらなかったりする。要は、ちょくちょく「暴投」するのが「イップス」の最大の特徴であり、遠くに投げることが得意な反面、近くに投げるのはむしろ苦手だといえる。

だから、イチロー選手を含めて「肩が強い」選手ほど「イップス」になってしまうことが多いそうだ。肩が弱い私にはまったく無縁でも、強肩の井口君はイップスに悩まされる可能性が結構高いことになる。

ちなみに、イップスに悩む選手の分析としては、①責任感が強く、②真面目で、③完璧主義、④特に運動能力が高く、⑤そのため周りの目を気にする反面、⑥嫌なことも我慢できる…などといった特徴があると言われている。なんだか「誰かさん」に似てはいないか。

続・鬼軍曹と二等兵

さて、井口鬼軍曹から叱られた記憶は本当にたくさんある。まずはゴロの捕り方である。

私はどうやら「対人」であれ「対物」であれ、相手に対し

てシンクロしてしまう傾向が強いらしい。だから、ゴロが飛んできた場合、ボールのバウンドに合わせて自分自身もまたバウンドしてしまう…と言うのだ。

「自分は跳ねんでもエエねん！」と、軍曹から何度も指摘された。私は跳ねている自覚などないのだが。

子どものころ、「ゴロは体の正面で捕れ」と教わったが、最近は「左足の前で捕れ」と教えられる（右投げの場合）。左手のグラブを左足の前に出して捕球し、送球動作に入る一連の流れの中では、自然に体の正面で捕球していることになるのだそうだ。

ゴロ捕球の姿勢としては、しっかり腰を落としてボールに目線を合わせる。腰を低く落とせば「トンネル」を防止できるし、仮にイレギュラーした場合でも、ボールを体に当てて止める（自分の前に落とす）ことができる。

わかっちゃいるのよ、頭では。ただ、身体がついてこないだけ。また、ボールをしっかりと見たため、逆にバウンドに惑わされてしまうのも、世の常・人の常なのよ。

しかし、そんな「屁理屈」が鬼軍曹に通じるはずもなく、私のゴロ処理の下手クソ加減は「セカンド・ゴロ」（セカンド・ラブ：中森明菜）という替え歌になった。

ゴロも二度目なら　少しは上手に
捕って　ファーストに　送りたい
正座するように　両足そろえて　つまづくだけなんて
代わりたくない　ここにいたいの
そのひと言が　言えない
見せないで　エラーついた　スコアなど
どこかへ　しまって欲しい

なさけない　テンションが　高まって
とまどうばかりの　わたし

ゴロも二度目なら　少しは器用に
ベンチの期待に　こたえたい
グラブをはじいた　ボールつかめずに
オロオロするなんて
逃げようとする　ボールのヤツを
動かぬように　止めたい
見せないで　エラーついた　スコアなど
どこかへ　捨てて欲しい
せつなさが　クロスする　グランドで
追い込まれるのは　イヤよ

見せないで　エラーついた　スコアなど
どこかへ　捨てて欲しい
せつなさは　モノローグ　野次の中
とまどうばかりの　わたし

（1998/11/18　原作:寛　補作:尚）

また、キャッチボールでもフライ捕球でも同じだが、早いうちからグラブを前に出して待っていると、ボールの行方を見失って捕球ミスを起こす…というのが鬼軍曹の持論であった。

「ボールが目の前に来たら、そこでヒョイとグラブを出せばエエねん」などと、いとも簡単に言うのだ。要するに、飛んでくる虫を捕まえるのに、虫捕り網を目の前に出して待っていても、目標は定まらんだろう…と。虫がもう目の前にき

たところで網をさっと出してこそ、うまく捕獲できるだろう…と。ボールも同じだよ…と。

そりゃね、軍曹みたいに素早くグラブが出せるなら、そんな「芸当」も出来ましょうよ。でも、アタシの場合はドンくさいから、そんなカメレオンの舌みたいに、ヒョイとグラブの出し入れなんぞ出来るわけがないのよ。

それでも、軍曹の指摘が正しいことを自分の頭で納得しておくことは大切である。「継続は力なり」と誰が言ったかは知らぬが、何でも続けてやっているうちに何とかなるものだ。特に外野フライを捕るときに、まず落下点を見極め、そちらにダッシュして、最後の最後になって初めてグラブを出す…という「芸当」も、最近はずいぶんとうまく出来るようになってきた。

苦節ウン十年、鬼軍曹の厳しい教えに、身体がようやく順応してくれるように…（涙）。

雌伏の時代

阪神淡路大震災で受けた打撃で、私たちにとって最も大きかったのは、野球部の練習場所が無くなったことだ。神戸市内の野球グランドは、いずれも瓦礫置場、資材置場や仮設住宅の敷地となった。野球のごとき不要不急の「お遊び」なんぞは後回しになるのが当然だった。

しかし、「震災は全国で起きてるんじゃない。兵庫で起きてるんだ！」というわけで、日弁連野球連盟加盟チームの皆様方からは有難い「義援金」を頂戴したものの、全国大会の予選を免除してもらえるはずもない。なんとか練習場所を探して、チーム力の維持いやアップを目指さなければならないの

だ。

三田市や三木市まで行けば、使える野球場が幾つかあったので、毎月の指定日のアサイチに現地まで行って申し込み（当時は早い者勝ちだったと思う）をするなどして球場を確保した。三田の城山や駒ヶ谷などが良い球場だった。また、神戸ＧＳ球場やサブ球場も、わずかな枠ではあったが使用不可能ではなかった。問題はその抽選である。毎月１回ド軍の関係者がＧＳ神戸に集まって、抽選会に参加した。上谷佳宏弁護士の奥様や、井口君の事務所の事務局（当時）の木下律子さん、ウチの妻なども抽選要員として重要な戦力であった。

さらに、ちょっと遠いが、兵庫県佐用郡上月町にあった「上月リバーサイドクラブ」の附属グランドを利用しての合宿がド軍にとって大切な練習機会となった。

このころ、ド軍で流行ったのが「特定小電力トランシーバー」である。当時はまだ携帯電話の電波が行き渡っておらず、何台かの車で合宿先へ移動する間に相互連絡が困難なことが多かった。そこで登場したのが「特定小電力トランシーバー」であり、免許不要で見通し距離最大２㎞まで使用可能という優れものであった。

ドルフィンズ・メンバーの多くは、KENWOOD のトランシーバーを所有し、スキー旅行などでも活用するなど、たいへん重宝したものである。

ところで、残念なことに電波法の改正により、私たちが持っている特定小電力トランシーバーはもうすぐ使えなくなる。使えなくなる…とは、使った場合には刑事罰の対象となってしまうとの趣旨であるから、見逃すわけには行かない。2005 年以降の商品は新基準に準拠しているため大丈夫とのことだが、私たちが購入したのは 1995 年前後なので、間

違いなく「旧スプリアス規格」と思われ、2024 年１１月末日をもって使えなくなる。
　KENWOOD の WEB ページで、使えなくなるトランシーバーの型番を公表しているので、確認されたい。
(https://www.kenwood.com/jp/products/information/lpd_spurious.html)
　なお、すでに述べたが、「上月リバーサイドクラブ」は閉鎖されて久しい。水害で野球グランドが使えなくなり、その復旧できないまま、その後ホテルも閉鎖されてしまうという、ちょっとばかし悲しい経過だった。
　井口君が「野球○×テスト」を準備して、みんなで受験したのもリバーサイドだった。「守備をしているときは、なるべく球が飛んで来ないよう祈るのがよい」という設問に「○」をつけた二等兵は、もちろん鬼軍曹に叱られたのであった。

お仕事の話

　もちろん井口君は、弁護士業務においても常に第一線を走り続けた。時代を見据えながら、一歩も二歩も先のことを考えていたのが印象的であった。後でも触れるが、弁護士業務の未来を考えるため、わざわざロサンゼルスまで何人かで出かけて行って、裁判事情や法律事務所の現状などを見学に行ったこともある。
　さて、思い返すと井口君と初めて「協働」したのは刑事事件だった。いわゆる否認事件であり、被疑者と毎日接見することが必要と考えらえたが、「弁護人一人では心もとないので応援して欲しい」と井口君から頼まれ、市内の警察署に２人で交替しつつ１日おきに通った。

　そのうえで、毎日接見記録を作成してお互いに必ずＦＡＸで送りあうことにした。当初は、公証役場で確定日付をもらおうか…などとも考えたが、ＦＡＸ送付すると送信日時が自動的に印刷されるので、何か問題があったときでも、この送信日時記録が役に立つのではないか…と二人で考えてのことであった。
　それで、なんとか２０日間の勾留期間を乗り切り、処分保留で被疑者が釈放された。二人で「ヤッホー」と喜んだら、そのまま別件再逮捕されてしまい、さらに２０日間の勾留が続くことに…。あちゃ～！
　しかし、結局は合計４０日を超える身柄拘束を経て、被疑者は不起訴処分に終わった。めでたし、めでたし。
　このときの体験を踏まえ、私自身、否認事件については、土日を含めて毎日接見することを心掛けて実行するようになった。最も長かったものでは 100 日間連続での接見というのがある。このときは１通たりとも被疑者調書にサインをさせなかった。それが功を奏したのか、複数の起訴事実のうち幾つかについて控訴審で逆転無罪判決を得ることが出来た。
　もし井口君との「協働」がなければ、毎日の接見を欠かさないという「覚悟」は醸成出来なかったかも知れない。
　このほかにも、井口君と一緒に取り組んだ仕事はたくさんあったが、このように私の方が井口君に教えられることも多々あった。

ロサンゼルスにて

　1997 年（平成９年）11 月、ひょんなことからロサンゼルスへ行く機会を得た。当時、ドルフィンズのメンバーらを

中心に「スポーツ法研究会」なるものを立ち上げて定期的に勉強会を実施していたが、その延長線上のことであった。

ロスの空港には、井口君の知人であるウォーレス弁護士がお迎えに来てくれていた。１１月というのに温暖なロスではＴシャツと短パンが良く似合う。

ロスに到着したのが 11 月 1 日で、前日がハロウィンだったこともあって、ウォーレス氏のお宅で１日遅れのハリウィンパーティを楽しんだ。「Trick or Treat？」という今では定番の合言葉もこのとき初めて知った。

また、ロスでは「D.D.（Designated Driver：指定運転者）」という、今でいう「ハンドルキーパー」の制度が当時から定着しており、当番制にせよ抽選制にせよグループのうち１人はドライバーの役目を果たすためにお酒を飲まないことを知り、その合理性に納得した。ちなみにそのお役目は私が務めさせて戴いた（ジャンケン弱いのよね）。

ところで、アメリカの飲酒年齢は２１歳以上である。リトルトーキョーで生ビールを買おうとしたとき、井口君が「あんたは２１歳未満だろう」と言われて、ビールを売ってもらえなかったことがある。「ＩＤカードを見せろ」とまで言われたが、私が大笑いして「彼は３０歳をとっくに超えていて、妻も娘もいるよ。私が保証するから！」と言ったら、納得してビールを売ってくれた。伊藤信二君はフリーパスだったのに井口君がなぜ？ と、私たちは首をかしげた（笑）。

ロスでは、裁判所で刑事・民事の法廷を見学した。民事の裁判長が「日本から来た弁護士だって？」と我々に興味を持って、裁判官室にまで案内してくれた。刑事の方は入庁する際と、法廷に入る際にそれぞれも身体及び持ち物の検査があった。今でこそ神戸地裁にも導入されているが、さすが銃社

会米国ならではのことと強く納得した。

上谷佳宏弁護士の友人のロス市警・警官にポリスアカデミーを案内してもらったときには、警察学校の学生たちがみんな５万ボルトの電気ショックを体験する場面に出くわした。ロス市警の警官に支給されるスタンガンは、バネ仕掛け？で「＋」及び「－」の二本の電極針が相手に向かって空中を飛ぶように出来ている。相手の着衣に針が引っかかった時点でスイッチを押すと、５万ボルトの電流が流れる仕組みだ。

この体験は、学生が両手に電極を持たされ、一瞬だが５万ボルトの電流を受けて、その威力のほどを自分たちの身をもって知るというものだ。みんな奇声をあげながら、後ろに吹っ飛ぶように倒れる。おお、５万ボルトとは恐ろしい！

他人事のように見学していると、教官が「今日は日本から弁護士の皆さんが見学にきています。彼らにも体験していただきましょう」などと言うではないか。え～、それはタイヘンだなぁ…などと思っていると井口君をはじめ、みんなが私のうしろに行列を作って私を前に押し出すではないか！

しかし、日本男児たるもの、ここで後へは引けない。全員が逃げたとなると日本の恥だ。私は笑顔で「よろこんで！」と答えてしまう。やっぱり、お調子もんなんやね。

両手に電極を握って「ヘイ、カモン！」と叫んだ私の思惑としては、みんな後ろに吹っ飛んでいたので、お尻を落として踏ん張り、倒れないようにしよう…というものだった。

しかし、５万ボルトの威力は恐ろしい。両足の力がさっと抜けてその場にヘナヘナと座り込んでしまったのだ。それでも吹っ飛ばされることも奇声をあげてしまうこともなかったことがウケたのか、学生たちからヤンヤの拍手をもらった。

この経験は貴重だった。スタンガンは相手の抵抗を排除す

るには十分すぎるほどの威力がある。日本の警官には警棒と拳銃が支給されているが、スタンガンの使用も検討すべきではないか…とこの時から考えるようになった。

逆に、相手に奪われたときに困る…との意見もあるようだが、それは拳銃の方が深刻である。スタンガンならば、警官の身体とストラップで結び、スタンガンが奪われた場合にはストラップの先の安全装置がスタンガンから抜けてしまって電流が流れなくなるような仕組みを作ればよいのだから。

あと、ポリスアカデミーで衝撃的だったのは、我々日本人は銃器の扱いに慣れていないため、ついつい「乱射」する傾向が強い事実を知ったことだ。もちろんシミュレーションなのであるが、銃をもってバディ（相棒）と一緒にパトロールのうえ職務質問を開始するという場面。エネミー（対象者）の動きに注意しておかないと、バディも自分もあぶない。特に対象者が懐中から何かを取り出したときに注意が必要なのだ。それが銃器だったりナイフだったりして危険を感じた場合には躊躇なく発砲してよいルールだ。

ところが、我々は懐中からモノサシを取り出しただけの対象者に発砲したり、ただ自分の胸をさわっただけの対象者に発砲したり。しかも１発では終わらないのだ。２発３発と立て続けに発砲して対象者を死に至らしめる。着弾は赤色・黄色・青色などで記録されるが、赤色は致命傷、黄色は危険性大、青色は命に別状なしなどを意味するところ、我々の着弾は常に赤色か黄色で、それが何発も…ということになる。

私も、もちろん井口君も例外ではなかった。

教官が「おお、日本人はとち狂ってる！」と大いに嘆いたことはけっして忘れてはいけないと思っている。

なんだか、記憶が鮮明なことから書き出すと、話がおもしろい方向へと傾きがちだが、私たちは、実際に法律事務所も何か所か訪ねている。詳しいことは忘れたけれど、ウォーレス弁護士が「私たちは、かつてはプロフェッションだった。いまはもはやビジネスマンに過ぎない。」と言っていたのが印象的であった。

それは、この当時から数えて１０年ほど前に、ニューヨーク方面から押し寄せてきたという。「君たちも、いずれ同じようになる。注意が必要だよ」とウォーレス氏は言った。

あれから２５年、司法改革の嵐を経て、私たちもプロフェッションからビジネスマンへの変貌を遂げつつあると感じているのは私だけではあるまい。

なおことナオコ

ロスでの我々のお宿はホテル・ニューオータニだった。ある日の朝、朝食のレストランで、タレントの野沢直子さんに出会った。

そのときの井口君のセリフが素敵だった。「ボクの娘もナオコという名前なんですよ。あなたの名前を戴きました」って…え？ それはちゃうんとちゃう？

同じ日のお昼、多少はお土産を買わなくちゃ…と言うことで、ロデオドライブ（ロスで有名な高級ショッピングセンター）まで出かけた。しかし、結局はブランドものに用のない私と井口君は、買い物に一生懸命な伊藤君を待つため、２階のカフェテラスでコーヒーを飲んでいた。

そうすると、私の座った場所から正面に見えるエレベーターの扉が開いて、一瞬「後光」が射したように感じられた。あれは、なんとモデルで女優の飯島直子さんではないか！

たしか彼女はＴＵＢＥの前田さんと結婚したばかりで、ロスに新婚旅行に来ていたはず。思えば日本を立つとき、妻が「ロスに行ったら、大好きなナオちゃんに会えるかもよ」と言っていたっけ。「あほ、それやったら月１回行ってる東京で会う確率の方が高いわ」と言ってた自分の方がアホやった。

そんなことが頭の中をぐるぐる回っているうちに、飯島直子さんはどんどん私の方に近づいてくるではないか。ああ、ナオちゃんは私に会いに来てくれたのかぁ…というところまで妄想が膨らんだとき、飯島直子さんはホントに私の隣（正確には背中合わせだけど、手を伸ばせば届くところ）に座ったのだ。

井口君は、欠伸なんぞをしてまったく気づいていない。私はそっと彼女を指さして、声には出さず「い・い・じ・ま・な・お・こ」と井口君に知らせた。一度は「うそ～ぉん」と言った井口君も、すぐに本物だと確認して目を丸くする。

ああでもない、こうでもないと二人で相談した結果、声を掛けない手はないだろうと。

私が「飯島直子さんですね」とそっと声を掛けた後を井口君が引き取る。「ボクの娘もナオコという名前なんですよ。あなたの名前を戴きました」って…今朝とおんなじセリフ。

プライベートと言うことで、一緒に写真を…というのはやんわり断られたが、握手はしてもらえた。井口君が先に右手で握手したので、私は左手で握手してもらった。

そのあとで「あ～、もうこの手は洗わへんでぇ！」と私が叫んでいたと井口君は帰国してからご家族に話したようだ。たしかにそれは事実であるが、そういうのはまあファン心理から自然と出る「お約束の言葉」であって、本当に手を洗わない…ってことはなかったのよ、奈緒ちゃん。

家族のこと

パパが毎週末に趣味の野球に出掛けて行くことは、家族にとって余り喜ばしいことではないだろう。殊に幼い子どもがいる家庭では「今日もパパいないの？」となり、すこぶる評判が悪いと思う。「亭主元気で留守が良い」との境地に達するには、結婚後１０数年以上の経過が必要なのである。

井口君もこのことには大いに？悩んでいた。

しかし、ドルフィンズ創設責任者の一人として、また真の意味でチームを引っ張っていく存在として、井口君がいないわけにはいかない。

井口君にとって「野球」とはいったい何なのか。このテーマでしっかり話し合ったことはない。ただ彼にとって最も大切なことは「チームとして勝つ」ことだった。野球が出来ればそれで良いわけではないのだ。

ドルフィンズとして勝つことが、井口君にとっては最も大切なテーマだった。このことはド軍が井口君を中核とするチームであり、そもそも井口君がいなければ成立しなかったチームであること、そうなったのも彼が持てる能力と「志」に負うところが大きいことに照らせば、当然の帰結となる。

ここで言う「志」とは、井口君が幼いころより続けてきた野球に対する「思い」であり、万年補欠ごときの私が「したり顔」で解説するのは極めて難しい。

まあ、結論らしきものを端的に言うなら、ドルフィンズは井口君の「化身」であって、井口君こそが「ミスター・ドルフィンズ」なのである。

井口君がいたからドルフィンズが出来た。ドルフィンズが存在する以上、井口君が必要である。これはまさに「卵が先

か鶏が先か」の議論に似ている。まあ、ホントは井口君の方が先なんだけどね。

このようなわけで、井口君にとって、家庭とチームとの間の「葛藤」はむしろ「宿命的」であったと言わざるを得ない。

ちょっぴり切実なメールをご紹介しよう。

「予選は９月２７日（土）を外すことができるのなら、是非外して翌日にしてください。子どもの小学校最後の運動会の予定日であります。昨年は、家族のブーイングを尻目に尾道に行きました。よろしくお願いします。井口」

パパだって、家族のこと忘れてるわけじゃない…ということをどうかご理解願いたい。

ところで、ある日のこと、私がたまたま石橋伸子さんに会った際に、「いつもドルフィンズが井口君を引っ張ってごめんなさい」と謝ったら、「井口が何も言わないので、野球のスケジュールがわからない。それが一番困る」とのことであった。それで、当時、始まったばかりのＭＬ（メーリングリスト）に石橋さんをこっそり登録することにした。こっそりとは井口君には内緒にする趣旨である。

石橋さんには「野球の予定がわかって助かる」と喜ばれたが、何か月か経ったあと「ドルフィンズメーリングリストに入れていただいたことが、井口に見つかってしまいました！ああ…同じ事務所では秘密も持てません」との嘆きのメールを頂戴した。

それでも、井口君から「石橋をＭＬから外して欲しい」といった希望なんぞは一切出されず、石橋さんがＲＯＭ専（Read Only Member）としてＭＬ登録される状況はその後も続いた。なお、その頃から井口君が私のことを「調停委員」と呼ぶことがあったが、その真意はいまだに謎である。

さて、そんなわけで我々は多かれ少なかれ家族に対する「罪悪感」を抱きながら野球を続けてきたわけであるが、そんな井口君が主人公の替え歌がある。

山口百恵の「**ロックンロール・ウイドウ**」の替え歌で「**ベースボール・ウィドウ**」である。

野球したさの神戸登録　あなた動機が不純なんだわ
茶髪美人のマネージャー
いつもベンチで歯ぎしりしてる
大阪（てき）のことにはケチつけて
スーパーヒットを狙っているけど
なにかが違うわ
ガッツガッツガッツ　ガッツガッツガッツ
ガッツばかり　先ばしり
ベースボール・ウィドウ　ベースボール・ウィドウ
いい加減にして　あなた奈緒子のパパじゃない？

野次が気になる迷プレイヤー 肩に力が入り過ぎてる
ショートやらせりゃ　エスペシャリー
のればチームが勝てるのに
もしも誰かに聞かれたら
ヒロシは　今日は不調なんです
いつもとちがうと
かっこかっこかっこ　かっこかっこかっこ
かっこつけて　泣きたいわ
ベースボール・ウィドウ　ベースボール・ウィドウ
いい加減にして　野球はあなたの青春じゃない？
ベースボール・ウィドウ　ベースボール・ウィドウ

ベースボール・ウィドウ
（1998/10/8　作：尚　無添削：寛）

なお、この歌に対して井口君から「歌詞変更権の行使」はなかった。「お直しなし」の意味での「無添削」である。

二匹めの泥鰌（どじょう）

これは、日弁連の機関紙「自由と正義」1998 年１２月号の「ひと筆」に私が投稿したエッセーの題名である。

要は、その年に開催された倉敷マスカットスタジアムでの日弁連野球全国大会岡山決勝大会に堂々と札幌チームを破って出場した仙台チームの活躍を軸に、全国大会予選の組み合わせが事実上固定されてることや、ド軍がいつも大阪に敗けて全国大会出場を阻まれていることなどの「愚痴」を書き綴ったものである。以下に、一部を抜粋して転記する。

「わたし神戸ドルフィンズの監督事務取扱助監督代行兼広報担当なんです。肩書が長いでしょ。でも手足はご覧のとおり短いスから。あはは。実戦部隊として役に立たないかわり後方支援部隊に回ってましてね。ええ、野球場確保、スケジュール調整、宿泊手配、対戦相手との交渉、野球道具の管理・運搬、バッティングマシーンの保守・調整エトセトラ何でも来いです。う～ん、雑用係みたいですか。だけどナインのためならいくらでも汗かきますよ。やっぱ全国大会出場の夢が捨て切れませんからね。」

私はベンチワークが増えたことから、この年くらいに「助監督補佐」から「助監督代行」に「昇格」し、さらに 2001 年からは「監督代行」へと「再昇格」した。いつの頃からか、

井口君が私のことを普段から「代行」と呼ぶようになって、それがチーム内に広まったため、現在でも「代行」が私のあだ名となっている。

「あ、ウチですか？ いやぁ、今年も大阪に負けて予選落ちですワ。なぜか『蛇に睨まれた蛙』みたいに勝てないんスよ。予選で勝ったのは９３年の１回きり。９２年以降の通算で１勝５敗ですからね。」

やっぱり平塚球場の全国大会への出場は、ただの「奇跡」だったのか。大阪に対する「苦手感」は払拭されるどころか、どんどん増すばかりの時期であった。

「今度ウチが大阪を破るのはいったいいつのことでしょう。今世紀中に可能ですかねぇ。ちょっとオーバーですか。でも２１世紀までたった２年ですよ。それでなくてもウチには大きなハンディがありますからね。とにかく練習したくとも野球場がない。神戸市内のたいていの野球場には震災直後から仮設住宅が立ち並んでるんですよ。ま、野球はしょせんお遊びですから、被災者優先は当然ですもんね。で、野球のためには遠征か合宿。もし毎土曜に遠征や合宿を繰り返したりすりゃ、家庭崩壊する部員も出てくるでしょ。だから何とかもう大阪と対戦せずに決勝大会に出たいじゃないですか。『ブロック替えしてくれ』って連盟理事会に直訴したくなるのも人情ってもんでしょ。え？ そういうのをゲリマンダーって言うんですか。」

このあたりはもはや「愚痴」の域を出ない。でも、愚痴りたくもなる。そうそれが人情というものなのよ。

「たまにゃ我々だって決勝大会に出たいスよ。だから、きっとみんなも叫びたいでしょうね。仙台にあやかって『打倒〇〇！』って。二番煎じ？ 鵜の真似をする烏？　でもねぇ。

たかが野球。されど野球ですよ。柳の下の二匹めの泥鰌って笑われようが、勝ちたいじゃないスか。ねぇ、ぜひとも来年はね。」

このとき（１９９８年）の岡山大会には、井上監督と私とユキマネ（高島由季さん）の３人で「敵情視察」に行き、マスカット球場での一回戦４試合を観ながら全試合のスコアを私自身がつけた。実は、私にとってこれが「スコア付け」のデビュー戦であり、井上監督とユキマネに教わりながらヨチヨチ歩きを始めたわけで、また一つベンチワークを覚えたことになる。

このときの強烈な思い出は、懇親会場へ向かうシャトルバスに乗ったときのこと。同じバスに乗ることになったのが名古屋チームで、山下勇樹（いさき）さんが当時の主将であった。名古屋チームは１回戦で負けたのに、まったく屈託がなく、もう来年に向けての話に花が咲いていた。筋トレを義務化するだの、減量に賞金や罰金をつけるなど、「馬鹿話」と言うと失礼かも知れないが、まさに「全国大会常連チームの余裕」というものを感じた。本当にすごいなぁ。俺たちとはまるで空気感が違う…。

そして、懇親会では大阪・松並投手の好投が讃えられ、大阪チームがずいぶん盛り上がっていた（翌日の決勝戦を大阪チームが制したことは後日知ることになる）。

懇親会でしこたま飲んだのに、帰り道の新幹線でも井上監督に缶ビールをおごってもらって、新神戸駅に着いた頃には「へべれけ」状態の私であり、そのときの記憶なんぞ殆ど残ってはいない。

ユキマネによると、私は新神戸駅の階段に座り込んで、泣きじゃくっていたらしい。「全国大会に出たい」「ドルフィンズを全国大会に連れて行きたい」と繰り返していたという。井上監督は、ユキマネに「しばらく泣かせといてやれ」と言って先に帰られたそうだが、それも井上監督の優しさだった。

こんな私のちょっと恥ずかしい「号泣事件」を井上監督が第三者にお話をされたことはなかったように思う。このエピソードを知っているのは、他には井口君とサヨマネ（西尾小夜さん）くらいだ。それでも、「ああ、あのときなぁ…」と微笑される井上監督の顔が浮かぶ。私は助監督代行あるいは監督代行として、試合中は常に井上監督とともにベンチにいた。本当に優しいひとだったなぁ…と、今でも井上監督には感謝している。

2018 年５月、「井上監督を偲ぶ会」が開催された翌日だったか、井口君からメールが来た。

「藤本先生を偲ぶ会で、私はなんと話すのでしょうか。ごめんなさい。あの時、監督代行を岡山に連れて行きたかった。あのあとも、何度も、一人で替え歌を歌わせてごめんなさい😥。ごめんなさい、ばかりです。でも、なんか楽しかったです。…かなぁ」

ああ、井口君には、是非とも私のことをめちゃくちゃ偲んでもらいたかったなぁ（涙）。

そんなわけで、この「二匹めの泥鰌」は、「新神戸駅号泣事件」を踏まえたものであり、私にとってたいへん思い入れの深いエッセーなのである。

ただ、「来年こそは」などと書いておきながら、この「ひと筆」が「自由と正義」に掲載された翌年（1999 年）は、再び大阪チームに痛い思いをさせられるのであった。

それでも、仙台の高橋監督による「打倒札幌！」に引き続き、私の「二匹めの泥鰌」が「ひと筆」に掲載された意義は

大きかったようである。全国の日弁連野球連盟関係者にも広く読んで戴き、なぐさめの言葉？も数多（あまた）頂戴した。また、これが功を奏したのかどうか、連盟理事会においては予選のブロック分けについての議論が年々深まっていったのであるから…。

得手・不得手

人間だれしも得手・不得手がある。井口君にも苦手とすることがあった。それは「腕立て伏せ」と「懸垂」だった。あれだけの強肩を誇った井口君がどうして腕立て伏せや懸垂が苦手なのか、原因はまったく「謎」である。

また、井口君は走ることも苦手であった。外野守備でのダッシュや打者・走者として塁間を走ることにはまったく問題がなかったが、「長距離走」がイケナイのだ。

「口の中で血の味がしてくるねん」と井口君はボヤいた。神戸市北区の「しあわせの村」でジョギングコースを走っての感想である。私は中高を通して毎冬 36.5 キロの「強歩会」への参加が義務であったから、走るスピードはともかく長距離走が苦手ということはない。

震災の前年、「神戸ラビット＆タートルズ」が結成され、ホノルルマラソンへの参加が検討された。チーム名は「ウサギとカメ」だが、一番速い亀井尚也選手がラビット、一番遅い私がタートルであった。もし、井口君が参加しておれば、彼がタートルだったかも（笑）。

ところで、井口君は相手チームのブロックサインを解読するのが上手かった。まあ、自チームならどう攻めるかを考えれば選択肢は幾つかに絞られる。２死１塁で「送りバント」

のサインを出す馬鹿はいない（いや、私は出したことがあるのだけれど：涙）。「何回か相手のサインを見るうちに何となく分かってくる」と井口君は言う。

ただし、井口君は私の出すサインを見誤ることが多かった。「代行、サインが下手やねんなぁ」と私のせいにする井口君が、あるとき提案したのは「超絶単純・サルでもわかるサイン」だった。ブロックサインの担当を村上英樹選手に譲り、私はその隣でボーっと立っているだけ。実は村上選手の出すサインはダミーで、私が右足を段差に掛けている状態（波止場で「俺は待ってるぜ」みたいな）なら「送りバント」で、じっと「腕組み」してたら「盗塁」といった具合で、極めてわかりやすい。ただ「さりげないポーズ」というのは、私自身にとって極めてツライものがあった。考え事をしてつい腕組みしてしまうとランナーが突然走り出すからだ（笑）。そんなわけで、この「サルワカサイン」はワン・シーズンで終わった。

村田兆治氏との出会い

平成１２年（2000 年）は、ド軍にとって大きな転機となった。それまでの５年間（９５～９９）は、正に雌伏の時代であり、全国大会の予選では悉く大阪チームに負けた。京都チームとは勝ったり負けたりのほぼ互角だったが、大阪にはどうしても勝てない。

ところが、その年に５２期の新人たちがこぞってド軍に加入した。戸谷嘉秀、吉田哲也、吉田裕樹、村上英樹、柿沼太一、中園江里人、本郷秀夫、栗本正貴、岡崎晃、白川哲朗の１０選手である（順不同）。彼らの強みは何かと言えば、大阪

チームに対する「苦手感」が一切ないことである。私たちには「苦手感」どころか、ずっといじめられてきた「被害者感」まである。ちょっとしたＰＴＳＤのようだったと言えば、お叱りを受けるかも知れぬが。

さて、そんな新人たちがド軍を盛り上げてくれたおかげで、チームの雰囲気は最高に良かった。

そこへ現れたのが、かの「サンデー兆治」こと村田兆治氏である。全国大会予選を８日後に控えた９月１５日、小雨が降る遠矢浜公園野球場に現れた村田兆治氏は、ド軍の面々にキャッチボールの基本から伝授。ボールを持った右手とグラブの左手をそれぞれ反対側に捻じるところから始まる投球動作。「ここで捻じらないともったいない！」とのことで、全身のバネをうまく使っての投球動作を教わる。

そして、マウンドからの剛速球。さらにはみずからバットを握ってのノック。まるで、少年に戻ったかのように目をキラキラさせたド軍一同、兆治コーチの打球に飛びつく。「こらぁ！しっかりせぇ！それでも弁護士かぁ！」という「ちょっと何言ってるのかわかんない」叱咤激励を受けながら、楽しい楽しい練習時間に幕が下りる。

頂戴した「人生先発完投」というサイン色紙は、是非とも大会予選に持って行こう！とチームは一致団結。

実はこのコーチング、まったくの無償。井口君のお知り合い（顧問税理士さん？）のお取り計らいで、村田兆治コーチの登場となった。後日、兆治氏から金属製野球バット３本が届くという「おみやげ」までついた。

【2022 年１１月１１日、村田兆治氏がお亡くなりになりました。ここに御生前のご厚誼に深く感謝するとともに、心より哀悼の意を表したいと思います。】

但馬ドーム決戦！

さて、「兆治効果」は絶大だった。2000 年９月 23 日、但馬ドームで開催された京都・大阪・神戸の「三つ巴戦」であるが、まずは京都戦の火蓋が切って落とされた。

１番センター井口のレフトオーバーから試合開始。あわやホームランかと思われた打球がワンバウンドでフェンスを超えてエンタイトルド２ベース。２番サード茂木立が相手方エラーで出塁後すかさず盗塁してノーアウト２・３塁。３番ファースト松岡の遊ゴロの間に井口が果敢に（無謀に？）本塁突入を図るも相手方キャッチが見事なブロックで阻止。１死２・３塁で４番ライト筧のスクイズ失敗で３塁走者を失うも、ここで筧が奮起し、レフトへの一撃で松岡を生還させ先制の１点を奪取。

幸寺投手の立ち上がりも上々で、１回の裏を２三振・１四球・１左飛の打者４人に押さえる好スタート。

しかし、京都も黙ってはおらず、２回裏にはあっさりと逆転される結果（１対２）となり、ここから膠着状態でお互いに得点がないまま４回表裏の攻防が終了。

我々の反撃は５回表に始まる。四球で出塁した９番セカンド吉田（哲）の盗塁後、井口が左中間を破る見事な三塁打で１点を返し同点、反撃の狼煙（のろし）をあげると、続く茂木立も３塁エラーで出塁後すぐに盗塁、無死２・３塁のチャンスを作る。ここで再び筧のレフトへの一撃で２点を返し逆転、ようやくド軍らしい展開に。

６回表にも、７番レフト林（晃）の左前打、８番ショート吉田（ヒロ）のセーフティバント、井口の左前適時打で１点を追加。最終回には好投の幸寺から筧への継投策で、５対２

のままドルフィンズが逃げ切る結果となった。
　続く予選２試合目は大阪対京都戦。詳しいことは省略して、ただ大阪が１７対１の大差で勝ったことだけをお知らせしよう。なお、この試合の途中で、大阪の橋田選手が私のところまで「コールドって、なかったっけ？」と聞きに来たことも付言しておこう。
　そして、当日のファイナルは、神戸対大阪戦である。大阪の投手は我々が何度も涙を飲まされた松並投手。
　先攻ド軍で始まった初回、１番茂木立がいきなり左中間へ見事な一撃を放つ。これには堅守を誇る大阪陣も動揺したようで、続く２番吉田（ヒロ）が３塁エラーで出塁、３番松岡の２ゴロの間に各走者進塁して１死２・３塁。ここで登場した４番筧がきっちりスクイズを決めて１点を先取。さらに５番藤掛がレフトへ大きな犠牲フライを放って１点を追加、先行逃げ切りを得意とするド軍にとっては絶好のパターン。
　守っては連投の幸寺が、１回の裏に四球と味方エラーで１点を失うものの、２回から６回までをすべて打者３人に切り取るという好投を続ける。ただ、５回裏には松並に四球を与えた上に盗塁までされたが、目の覚めるような幸寺の牽制により２塁上で松並をアウトに。乗ってるときは試合の流れが全部こっちに向かってくる感じ。
　４回表には７番井口がレフトオーバーの２塁打を放ち、続く８番林が３塁手の暴投で２塁まで進塁。この間に井口が生還。さらにＤＨ戸谷に代わって登場した岡崎が左中間を見事に破る３塁打で林をホームに帰す。ここで茂木立に戻り、もう１打と期待がかかるも、打ち損ねて投ゴロ。しかし、球をつかんだ松並が茂木立にタッチに行くと茂木立はその手前で急ブレーキ、松並と「にらめっこ状態」に入る。この間に３

塁走者の岡崎が本塁突入を図るが、先程の全力疾走で膝がガクガクいっていたため、お約束のごとく本塁手前２ｍで転倒、あとはヨタヨタとホフク前進。しかし、松並はまだまだ「にらめっこ」の最中で、「ホーム、ホーム」と叫ぶ大阪陣の声は彼には届かない。ようやく我に帰った松並の投げる球が本塁に到達するのと、岡崎の手がベースに触れるのとは、文字通りタッチの差。この回に３点を追加して５対１。もはや負ける気なんかこれっぽっちもしない！
　さらに続く２番吉田（ヒロ）がライトオーバーの３塁打を放ち、ピッチャー交替。我々ド軍としては、全国レベルでも屈指の名投手・松並をマウンドから引きずり下ろすことに初めて成功！ 当然ながらド軍の３塁側ベンチは狂喜乱舞！ 但馬ドームは異様なまでの喧騒に包まれる状況に。
　さて、大阪は投手を橋田に替えて３回と１/３を打者１１人ノーヒットに抑える好投となったが、もはや手遅れ。試合の流れや勝負の行方はもう変えられない。
　幸寺は６回を打者２１人、ノーヒット、３四球、７三振、１失点におさえ、最終回（７回裏）、ノーアウト１・３塁から救援に入った筧は、続く打者３人をいずれも凡打に打ち取り、３ゴロの間に１点を献上したものの、試合を見事に締めくくった。
　最終スコアは５対２。対大阪戦としては実に７年ぶりの勝利。大阪を破った瞬間、ド軍のみんなは思わず抱き合っていた。井上監督がみんなの胴上げで宙に舞う。続いて勝利投手の幸寺が。私自身も熱いものがこみ上げてきて、目の前が白く霞みもう何も見えない。本当に汗と涙にまみれた大勝利なのであった。

球史に残る名古屋ドーム横浜戦！

名古屋ドームへの切符は得たが、如何せん、初対戦の相手である横浜マリナーズの情報が入ってこない。思い余って同期で横浜登録の小林雅信さんに聞いてはみたものの、「僕も一応は野球部員なんでねぇ」とつれない返事。ふん。テニスばっかりしてるくせに～！

さて、そんなわけで「畑中投手には気をつけろ！」くらいしか情報がない中でのプレイボール。エース幸寺の立ち上がり「絶不調」がド軍を襲う。１回裏の冒頭に３連続四球。あっと言う間に無死満塁のピンチで慌てるベンチ。筧投手はまだピッチング練習すらしていない。大急ぎでウォーミングアップしてマウンドに上る。

可哀そうだったのが戸谷嘉秀右翼手。まったく守備機会もないままにベンチに呼び戻された。当時、新婚さんだった彼の口癖は「私の趣味は妻です」（はいはい、ごちそうさま！）であったが、その大切な奥様をわざわざ名古屋まで連れて来たと言うのに活躍の場を与えられないままにベンチに呼び戻されるとは。本当に可哀そうなことをしたと思うが、まさに背に腹はかえられないピンチだったのだ（後で聞いたら、戸谷夫婦はハワイに行く予定をしてたのに全国大会出場のためにキャンセルして名古屋に来たんだとか。とほほ…）。

急造リリーフの筧が１回に３点、２回に２点取られて、あっと言う間に０対５となったが、４回の表に幸寺の左超２塁打、藤掛の左前打、岡崎の中前適時打などでようやく２点を返す（２対５）。

そして時間切れで迎えた最終回（５回表）には、吉田（ヒロ）の四球、井口の中前打、幸寺の四球で満塁になったところで、底力を見せつける藤掛の走者一掃の逆転満塁ＨＲ（ランニング・ホームラン）により６対５。まさかまさかの大逆転。もうド軍ベンチは蜂の巣をつついたような大騒ぎ。転がり込むように本塁にたどり着いた藤掛に対し皆から「殴る蹴る」のような祝福。みんなは狂喜乱舞、藤掛は阿鼻叫喚。

さらに筧が中超３塁打を放ち、「押せ押せ」ムードが続く。ここで横浜はエース畑中を降板させ、河合がリリーフに入るが、ＤＨ村上に暴投し、その間に筧が生還、さらに１点を献上してもらう。誰もがこのままド軍が逃げ切ると思った。いや、絶対逃げ切って欲しいと祈った。

しかし筧の力投もここまで。最終回（５回裏）１死満塁で迎えた打者は代打上山。「数では勝ち」と言い切った横浜チーム（控え選手が１４名。ちなみにウチの控え選手は５名）で、ここ１番のチャンスに登場するはず。彼の左中間を大きく破るサヨナラ３塁打で我々は涙を飲む羽目になるのだから。本当に「地獄から天国へ上ったと思ったら、すぐに地獄に逆戻り」（井上史郎監督・談）。2000 年９月２３日、かくして我々ド軍にとって２０世紀最後の「夏」が終わった（最終スコア：７対８×のルーズヴェルトゲーム！）。

試合終了後、ド軍のメンバーは為す術もなく、しばし呆然。一番悔しかったのは幸寺だろう。１時間くらいは口すらもきけなかった。井口もお弁当にまったく手をつけていない。ところが、たった１人だけ嬉々として不審な行動を取る男がいた。逆転満塁ホームランの藤掛だ。彼は、後にこのように語っている。

「いや～、よかった、よかった。ほんま最高の全国大会でした。あの後ですか？ すぐタクシーでひとりホテルへ戻りましてね。ひと風呂浴びて、寿司屋に行って、ビールをクイ

～ッとね。ほんま最高でしたよ。ええ？ ウチが負けたのにぃって？ そんな目先の勝ち負けにこだわったらあきませんよぉ。ほんまにエエ試合やった。試合の中身が大事なんやからねぇ。私の逆転満塁ホームラン。よかったでしょ？ まさに完全燃焼ですよ。しかも『球史に残る名試合』なんて言われてたじゃないですか。なまじ満身創痍で勝ち残っても次の試合でボロ負けしたら目も当てられんし、余計に悔しい思いするじゃないですか。私としてはこれでよかったですね。ちゃんと納得しましたよ。翌日は神戸に早く帰って仕事も出来たし、言うことなしですわ。ハハハ」

このシーズンを最後に、藤掛は逆転満塁ホームランの記録を勲章に引退宣言をしてしまう。事務所ボスである藤掛の決断に一番驚いたのはトミマネ（富山泰代さん）だったかもしれない。

しかしながら、これは同時に、後の名捕手・井口寛司の誕生が運命づけられた歴史的瞬間でもあった。

ただ、横浜との「死闘」はたいへん有意義であった。2000年名古屋大会を契機として神戸ドルフィンズの名前が全国的に「認知」されたからであろうか、その後は親善試合などのお誘いが増え、2001 年に始まった横浜・名古屋・神戸の定期戦「三港戦」は、２０年以上を経た現在に至るもずっと定着している。ありがたいことだ。

また、よく考えてみれば、「二匹めの泥鰌」で私が、**「今度ウチが大阪を破るのはいったいいつのことでしょう。今世紀中に可能ですかねぇ」**などとボヤいていたことは、いえいえ、ちゃんと２０世紀のうちに実現したではあ～りませかぁ！

そして、この「球史に残る」とまで言われた横浜マリナーズとの「死闘」こそ、神戸ドルフィンズにとって、けっして

忘れることができない思い出の名場面である。

ちょうど、神戸ドルフィンズの創部 10 年を目前に控えた頃のことであった。

名捕手・井口寛司の誕生

上記のとおり 2000 年の名古屋大会を最後に藤掛捕手が現役を引退した。たしかに、本人にとっては素晴らしい「引きどき」であったろうし、スッキリとしたことだろう。しかし、残された側にとってはかなわない。

井上監督、羽柴助監督、そして代行こと私の３人が額を寄せ合って「どうすんべぇ？」と悩んでいたら、あっさりと問題解決。井口君が手を挙げてくれたのだ。

「ボクがやらんと、しゃあないやん」と井口君は笑った。「小学校ではキャッチャーやってん」だって。それなら安心か…と思ったら、意外とＰＢ（パス・ボール）が多い。だが、井口君はスコアブックを見て、「これWP（ワイルド・ピッチ）とちゃうん？」などと、のたまう。

そもそもＰＢとWPの境界線は難しい。投手は「それくらい捕ってよぉ！」と思うし、捕手は「そこは勘弁してよぉ！」となるのが人情というものなのだから。

しかし、徐々に井口捕手は頭角を現した。自分で言うのも何だが、私が大切にしてきたキャッチャーミットを井口君が使うようになって、めきめき腕があがったように思う。まあ、それまで井口君が使っていたミットがちょっと小さ過ぎただけのことなんだけどね。

井口捕手の強肩は当然ながら「二盗阻止」において発揮された。両ひざを地面につけたままでの送球、つまりは上半身

のバネだけで二塁への送球ができるのだから驚きである。藤掛捕手も二盗阻止では全国レベルと言われてきたが、井口捕手はこれをあっさり凌駕した。

広島オーリンズの爲末和政投手は、私と研修所同期同クラスであるが、井口捕手について「膝をついたまま２塁に送球したのには驚いた」と絶賛していた。横浜マリナーズの瀬古宜春GM（現・日弁連野球連盟会長）も、井口君のことを「特に捕手としてボールを取ってから投げるまでのスローイングの素早さと（座ったままで二塁に送球することもできた）、送球の正確さで対戦相手を警戒させた」と述懐されている。

ともかく、井口君のテンションがド軍の勝利の可否を決定するというのが、私の持論であった。ド軍は「先行逃げ切り」を得意としていたが、その反面で先取点を取られると途端に意気消沈する。いわゆる「シュンたろう」になってしまうのだ。そんなときこそ、井口君のテンションがド軍を救う。逆に井口君のテンションがダメダメなら、もはや勝利は望むべくもない。

だから、マスクをかぶれば二盗阻止に燃える名捕手であり、外野守備にまわれば本塁へ矢のような「レーザービーム」を放ってタッチアップすら許さない井口君の存在はド軍にとってたいへん重要だったのだ。

ところで、井口捕手のキャッチングは絶妙であった。ストライクかボールかコースが微妙な場合、井口君はミットをまったく動かさずに捕球する。そして「よっしゃ～！」と頷く井口君に審判は思わず「ストライク！」と宣告してしまうのだ。要するに「キャッチャーの要求した通りの球が来た！」という筋書きの「演出」なのであるが、これが実にむずかしい。

メジャーリーグでさえ、捕手がボール球を受けた瞬間にミットをストライクゾーンへと動かす場面を良く目にする。審判の目を誤魔化そうとしてのことだろう。

しかし、井口君はまったくその逆の発想。ミットの手首側から指先のネットまでを駆使して、ミットを動かさずに堂々と捕球する。そうするとミットの端っこで受けた球があたかもミットの真ん中で受けたように見えるから不思議だ。あるとき、これを見抜いた親しい審判から「井口さん、ミットを動かさずに捕ってるの、わざとでしょ？」と尋ねられていた。

あっぱれな「井口マジック」なのであった。

そして、井口君愛用のキャッチャーミットの手入れは私の仕事だった。試合の合間にミットの砂埃を落してドロースを塗りピカピカに磨きあげる。「ありがとう。うれしいなぁ。元気が出るよ！」と言った井口君の笑顔、今も忘れない。

さて、このミットには大きな「不幸」が降りかかったことがある。

雨天での試合の後、野球部のチームバッグの中にミットが紛れ込んだまま持ち帰られたところ、バッグの中身であるキャチャーセットやヘルメットなど、いずれの道具類も雨に濡れていたのであるから、道具を持ち帰った担当者としては、チームバッグから中身を取り出してそれぞれ個別に乾燥させるなど適切な措置を行うべき職務上の義務があるのにこれを怠り、漫然とこれを放置したことによってカビが繁殖するための高温多湿条件を保持し続けた結果、井口捕手愛用のキャッチャーミットに無数のカビを繁殖させたものである。

「罪名及び罰条」までは書けないが、起訴状風に書くと上記の経緯であった。これに「怒り」を露わにしたのはサヨマネである。このミットを持ち帰るや、グラブやミットのメン

テナンスを業とするプロフェッショナルのもとに持ち込んで分解修理を依頼し、見事にこれを復活させた。
　なお、修理費はサヨマネが出捐したが、頑として口を割らないのでサヨマネの負担のままであり、また修理費の詳細はいまだに不明である。
　おかげさまでこのミットは、その後のマスターズ大会などでも活躍したところであり、2019 年１１月の大会にも札幌へと持参した。現在は、我が家で「余生」を送りながら、時々はド軍の練習にも参加している。

優しい言葉

　井口君は言葉を大切にした。以下の一文は井口君からＳ弁護士への「独立開業」をお祝いするＦＡＸ文書である。
　「独立開業おめでとうございます。自分の事務所は非常に気持ちいいと思いますが、いかがですか。
　独立は、事業の独立を意味しますし、責任の独立も意味します。事件でいろいろ苦労したことはすべて自分の実力になりますし、またすべて自分の責任になるのです。
　ですから、イソ弁の時代と違い、もうひとふんばりして調べることを心がけてください。条文もよく見てください。そして、わからないことがあったら、いつでも聞いてください。
　さあ、切磋琢磨して、よりよい法律事務所をつくりましょう。事務所開きにはうかがいます。今後ともよろしくお願いします。」
　本当に優しい言葉ではないか。このＦＡＸ文書が送付されたのは平成１２年（2000 年）のことであるが、Ｓ弁護士は

その後２２年を経ても、なおこのＦＡＸ文書を大切に保管していたようだ。
　井口君とＳ弁護士との関係性について詳しいことは知らなかったが、このたびの井口君の訃報を受けて、まっさきに私のところに電話をくれたのがＳ弁護士であった。なぜ私に架電してきたのかすぐにはわからなかったが、お話を伺ううちに、私と井口君との関係性を十分に理解したうえでのことだとわかった。
　同じ気持ちを分かち合える相手と話したかった…という趣旨のことをＳ弁護士は言った。なるほど。気持ちの整理がつかないときはそれが一番の方法なんだろうなぁ…と私自身も感じ入った次第である。
　さっきのＦＡＸ文書は、後日 Ｓ 弁護士が私の Facebook に投稿したものである。特にコメントは付されていなかったが、井口君に対する感謝の思いは伝わってきた。井口君の優しい言葉に支えられたことがきっとあったのだろう…と、ひとりごちた。

裁判傍聴の話

　奈緒ちゃんいや井口奈緒子弁護士がまだ中学生の頃、平成 18 年（2007 年）の夏のことだと思うが、私が弁護人をしていた銃刀法違反被告事件の公判を井口父娘が傍聴に来たことがあった。井口君によると、奈緒ちゃんに裁判の傍聴体験をさせたかったそうで、私が担当する事件の法廷に入ったのは本当に偶然のことらしい。
　この事件は、兵庫県警察本部の銃器対策課が総力をあげて検挙に邁進した事件（警察庁の「犯罪白書」にも掲載された

重大事件！）であり、傍聴人の多くは警察関係者だった。
　そんな重大事件のはずだったが、公判担当検事がたいへん不勉強だったため、鑑定書を作成した「科捜研」吏員の証人尋問（反対尋問）における私の発問について、検事が発する「異議」が、いずれも「的外れ」で、それによる落胆がなせるわざか、傍聴席の警察関係者より「チッ」という舌打ちさえ聞こえる始末であった。
　たとえば、私が拳銃の部品である「機関部体」のことを「フレーム」として発問した際、科捜研吏員が「フレームとは？」と聞き直したので、私が「機関部体と同じ意味です」と答えた途端、検事が「異議あり。機関部体とフレームが同義であることの証明がありせん！」と立ち上がった。やれやれ。「裁判長、第三回公判調書をお借り出来ますか」「さて、あなた（検事）の前任者が機関部体の定義をしています。『機関部体とはフレームとも称される拳銃の部品の１つで…』と。これ以上続きを読むことが必要ですか？」検事は黙って座ったが、私は「くだらんことで人の邪魔をして。記録くらい読んで来いよなぁ」と検事にだけ聞こえるように、そっと罵ってやった。
　事件の内容はともかく、本当に緊張感あふれる公判廷の様子を中学生の奈緒ちゃんに見学して戴いたことになる。
　後日井口君から聞いたところでは「藤本先生って、本当は格好イイんだ！」というのが奈緒ちゃんの感想だったとか。ちょっと待って！ playback！ playback！
　まあ、普段はグランドでしか会ってなかったからね。ただ、奈緒ちゃんがこの裁判を傍聴したことで弁護士になろうと思った…などとは聞いたことがない（笑）。

Dブロックから埼玉・西武ドームへ

　細かい事情はさておき、ド軍は日弁連野球連盟の心温まるお取り計らいにより、平成１４年（2002 年）より、これまでのCブロックからDブロックへの「お国替え」が許された。
「近畿三強だい！」（だんご三兄弟：速水けんたろう＆茂森あゆみ）の替え歌がウケたからではないと思うけれど（笑）。

日弁大会で だんご だんご ３つ並んで だんご だんご
予選させられ だんご だんご 近畿三強だい！

一番強ぅよい 大阪 大阪 一番弱ぅわい 京都 京都
あいだにはさまれ 神戸 神戸 近畿三強だい！

大阪想いの 神戸 神戸 神戸想いの 京都 京都
自分がいちばん 大阪 大阪　近畿三強だい！
今度予選をするときは 願いは揃って 違うブロック（組）
できれば今度は こしあんの 沢山入った もみじ饅頭

ある日 大阪と喧嘩 喧嘩 野次のことで 喧嘩 喧嘩
うらみがつのる 因縁 因縁 でも すぐに治らない

今日は 三田で 試合 試合　３チームそろって 試合 試合
うっかり 見過ごし カーブがきて　かたくなりました

春になったら 合宿 合宿
秋になったら 法曹野球 法曹野球
一年とおして 野球 野球 近畿三強だい！

（2000.1.26 作：寛）

尾道の「しまなみ球場」での予選対戦相手は、北九州マッツ及び沖縄ゲラーズ。大阪チームの汚いヤジから解放され、ド軍は伸び伸びと野球をすることが出来た。試合結果は、北九州戦を９対１で、沖縄戦を０対３ｘでいずれも神戸が制し、埼玉・西武ドームで開催される全国決勝大会へと駒を進めることが出来た。

当時、井口君は正捕手となって２年目で、事実上のキャプテンとしてド軍をまとめるべき立場を強く自覚するようになった。そして、かつて井口鬼軍曹が徹底的に鍛えようとした藤本二等兵については雑務処理能力の高さの方を重視し、これを伸ばすことでド軍における働きを充実させようと考えた。すなわち、井口君は私を戦闘員として育てることに終止符を打ち、むしろ非戦闘員としての雑務処理能力をさらにアップさせることで、ド軍を下支えさせることを強く意識し、私との「二人三脚」を大切にするようになったのだ。まさに替え歌制作の過程と同じく各自の持てる別異な能力の絶妙なコラボレーションが構築されるという構図であった。

この頃から井口君は私に対する「代行！」という呼び掛けを盛んに行うようになり、私に対して「判断力」「牽引力」等の発揮を強く求めるようになった。

しかし、まあ運が悪いときには、私も雑務処理能力の真価を発揮できない。その一つが全国決勝大会における「組み合わせ抽選」であった。せっかく予選で大阪との対戦がなかったにもかかわらず、西武ドームでの初戦の相手はなんと大阪だぁ！ 私の余りの「クジ運の悪さ」に井口は泣いた。しかも、第１試合はなんと開会式の前に実施されたのだ。開会式は試

合（神戸２対６ｘ大阪）の終了後に始まったが、ド軍にとっては閉会式になったという悲劇。

なお、コケてもタダでは起きないひま・こまコンビは、大阪戦をテーマにした**「開会前の試合（３年目の浮気/ヒロシ＆キーボー）」**と、埼玉チームの敗戦を慰める**「埼玉に贈る言葉（贈る言葉/海援隊）」**の２曲を懇親会直前に完成させ、２人で熱唱・披露すると言う芸当をやってのけた。

札幌ドーム大会で準決勝進出！

平成１５（2003）年もDブロックからのスタート。沖縄と佐賀・長崎そして神戸の３チームが一同に会しての「リーグ戦三試合」になる予定だったが、ＪＡＬの欠航が原因で沖縄チームのメンバーが第１試合（沖縄対神戸）に間に合わないアクシデントが発生。佐賀・長崎チームのご理解と温かいご配慮により、第１試合を中止してリーグ戦をトーナメントに組み替え、第２試合（沖縄対佐賀・長崎）の勝者がファイナル（第３試合）で神戸と戦う組み合わせに急遽変更。

その結果、沖縄が２６対６で佐賀・長崎を破ってファイナルに進出し、最終的に４対６ｘで神戸が何とか沖縄を制し、札幌大会への切符をゲット。

なお、予選開催後の懇親会は古坂弁護士夫妻の三線（蛇皮線）演奏で大いに盛り上がり、最後はカチャーシー（総踊り）で楽しく締めくくられた。

こうして乗り込んだ札幌ドームであったが、またもや私の「クジ運」の悪さで第１試合をチョイス。相手は新潟。大阪及び京都も札幌決勝大会に進出しており「近畿三強だい！」がぶつかる可能性もあったがここはクリア。しかし今度ばか

りは開会式を閉会式にしたくない！
　そんな思いも杞憂に終わった。ド軍は初対戦の新潟チームを９対４の大差で破り、準決勝へと駒を進めたのだ。
　準決勝の相手は５連覇を狙う常勝・東京チーム。「向こうが常勝ならこっちは上昇チームだ！」などと意気込んで臨んだ東京戦、残念ながら５対９ｘで敗退。ただ、東京は一回戦で京都、決勝戦で大阪とあたるという「近畿三強だい！」との対戦ばかりだったが、東京から５点をもぎ取ったのはド軍だけ。京都は０点、大阪は１点止まりだったのだから（笑）。
　なお、東京のヤジも、大阪と「どっこいどっこい」であることを、この試合で思い知らされる。

大阪ドーム大会で因縁の対決！

　Ｄブロックに移って４年目の平成１７（2005）年、ド軍にとって最大の試練かつチャンスが訪れた。予選の相手は広島及び北九州。この２チームを破れば全国決勝大会への道が開けるのだが、これまで広島チームとの公式戦でド軍が勝ち星をあげたことはなかった。創部以来ずっとド軍の前に大きな壁として立ちはだかってきた広島。２対３のド軍１点リードで迎えた７回の表、２死１・２塁の大ピンチを三振に切り取っての初勝利！ なんと創部１５年目にしての快挙であった。続く２ 試合目の北九州戦も０対８ｘで制し、大阪ドームへのチケットをゲット。
　しかし、またまた私の「クジ運」が宿敵大阪を引き寄せることに。だが、もはやド軍にとって怖いものはなかった。大阪チームを相手に１対６ｘの大差で勝利をおさめたのだ。
　詳細は割愛するが、ド軍のバットが何度も火を吹いて、フェンス直撃の大飛球までとび出したり、大阪の放ったレフトおーバーの打球は一直線に並んだド軍守備陣がすばやくホームに返球したりなど、本当にシビれる試合だった。
　そして、勝利の美酒に酔いながら、井口君と二人で用意した懇親会恒例の替え歌「われら（合唱）」（さくら（独唱）/森山直太朗）も披露させてもらった。

ぼくらは ずっと待ってる ここに出られる日々を
予選大会の 勝利を目指し こぶし振り 叫ぶよ
どんなに 厳しい予選も ぼくらは 笑って迎えた

くじけそうに なりかけても 頑張ろうと 誓ったよ
激戦の 予選の向こうに ドームの声援が 聞こえる
神戸 福岡 ただ勝ち残る 刹那に散りゆく 定めを知って
さらば広島よ 入れ替えのとき 変わらない指定席から 今

今なら通るだろうか 北九州の予選案
西日本でひしめく チームのために 出した 新しい提案
増えてゆく ７つものチームは 理事会を せかすように
大分 熊本 ただ舞い落ちる いつか 勝ち抜ける時を信じ
泣くな 小倉よ 忍耐のとき
飾らない あの笑顔は ゲラーズ

われら 野球人（やきゅうど） いざ舞い上がれ
永遠（とわ）にさんざめく 光を浴びて
さらば友よ またこの場所で会おう
もみじ舞い散る 日弁の
もみじ舞い散る 日弁の決勝で

（2005.11.18 原作:寛 補作:尚）

このウタは、実は当日の即興ではない。決勝大会以前に井口君がウタを作り、それを二人で何度も何度も推敲を重ねて最終的に完成させたものだ。これだけ二人で推敲を重ねた作品は珍しい。大阪との決戦を前に高ぶる気持ちをスッパリと振り捨てて、予選でともに戦ったDブロックの他のチームのみなさんに心を寄せて向き合ったのだ。その結果、こんな素晴らしいウタが出来上がったのだと思う。

なお、本番では最後の「さらば友よ」のところを井口君と私はついつい「さらば大阪よ」と歌ってしまった（笑）。許せ大阪よ！

さて、翌日の準決勝・札幌戦も結構シビれる良い試合だったが、残念ながら３対１でド軍は札幌に敗れた。それでもド軍としては得ることが多かった大会である。

「西日本に１つの枠」（北九州大会への道）

平成１８（2006）年、北九州で決勝大会が開催された。これはDブロックからの予選出場絵枠が１チームに絞られることを意味する。「プレ予選」で残った４チーム（沖縄・広島・福岡・神戸）が「ひろぎんの森野球場」に集結し、たった１つの出場枠を争う運びとなった。

トーナメント第一試合は神戸対広島。前年に初勝利を飾ったとはいえ、やはり広島は強敵である。しかし、ド軍はみごとに投打が噛みあい０対３ｘと勝利をつかみ、予選最終戦に駒を進めて、第二試合・沖縄対福岡戦のゆくえを待つ状況となった。

その最終回、福岡が無得点のまま２死無走者となった状況で、我々は沖縄チームの勝利を確信して３塁側ベンチへの移動を開始した。その刹那、我々の目の前をレフトオーバーの打球が飛び去って行った。それからの展開は本当に信じられないものだった。

最終回２アウトまで福岡の打線をピシャリと押さえてきた沖縄のエースが突然崩れ、あれよあれよと言う間に逆転サヨナラを食らったのだ。

「やっぱりここには魔物がおるんや」と井口がポツリ。平成３年夏、広島との初対戦を思い出したのは、けっして井口君だけではなかった。

最終決戦となった福岡戦、「ひろぎんの森の魔物」は６回の表に牙をむく。１死２塁から左中間に放たれた平凡なフライ…と思いきや、ド軍の名手レフト林（文敏）がまさかの落球、続く打者にも痛烈な左中間タイムリーを食らって福岡に逆転される。しかし、その裏、２死無走者から井口がセンターオーバーのランニングＨＲを放ち、手塚・幸寺の連打で再逆転！ところが、７回の表に福岡が粘って再び同点となる展開。そして迎えた７回の裏、バッターは林（ふ）。

その６球目、高めのボールを渾身の力で叩いた打球は左中間を真っ二つに！ 走る・走る・走る…まるで「魔物」を振り払うかのように駆け抜け、ホームにヘッドスライディングする林（ふ）であった。

この日のことについて、林文敏選手（現・福岡弁護士会所属）は以下とおり述懐する。

「ひろぎんの森のあのヘッドスライヒングですが、サードベースに向かっていた時、たしかサードコーチャーは迷いながらも止まれの指示を出していたと思うのです。が、同時に

ベンチから興奮し過ぎて出てきた選手が多数おられて、腕を勝手に回すもんですから止まったらいいのか、進んだらいいのか全く分からず、エイヤ！とホームまで突進したという次第です。あんなにホーム突入の判断が恐ろしかったことはありません（その前にやらかしてますし…）。セーフで良かったという安堵感をこの写真から感じ取ってくだされば…と思います。」

ひろぎんの森の魔物によって見事なまでに「演出」されたこのゲーム。ド軍のこれまでの試合で最もシビれたのは？ と尋ねられれば、ダントツでこの試合だと私は断言する。

さて、北九州大会は一回戦の名古屋戦でド軍は力尽きる。そして、井口君にとってはこれが最後の全国大会出場となったのであった。

井口寛司選手の「予告引退」

平成 22（2010）年、井口捕手が誕生して１０年目の節目に、井口君は「本年を最後に引退する」と宣言。しかし誰も信じなかった。いや、実は信じたくなかったというべきか。井口君のいないドルフィンズなんぞ誰も想像できなかっただけのこと。一種の「正常性バイアス」なのかもしれない。

その年の新年会だったか、前年の忘年会だったか、井口君は引退宣言をするとともに「最後のお願い」として「この1年だけで良いから藤本監督を復活させて欲しい」と皆に呼びかけた。

私は驚いた。正に「そんな話、聞いてないよぉ～！」である。井口君が引退することも驚きであったが、それ以上に、なにゆえ私がここでまた監督を…という疑問が頭の中を駆け巡った。このとき井口君が述べた理由や、その真意について細かくは覚えていない。だが、井口君の「熱い思い」はしっかりと伝わってきて、私は少しウルっとなった。

しかし、他の選手たちにとって「寝耳に水」の話であったし、井口君の野球に対する「熱い思い」が必ずしもチーム内において「共有」されていたわけではない。このことを、井口君と私はともに思い知らされるのであった。

「藤本監督をもう一度」の是非は何ら議論されることもなく、井口君の熱弁が「右から左に受け流される」ような形でこの話は「沙汰やみ」となってしまったのだから。

当時、井口君は、チーム内の雰囲気を危ぶんでいた。井口君は「ドルフィンズが大阪みたいになったらアカン！」とも言っていた。明るく和やかで風通しの良いチーム作りを目指してきた井口君にとって、そのころのチームの雰囲気はけっ

して望ましいものではなかったのだろう。藤本再登板の構想は、その抜本的な解決を私に求める気持ちと、井口君にとって最後となる舞台を私にプロデュースして欲しいとの思いから生じたものではないか…と思う。

私が監督あるいは監督代行として実質的な指揮をとっていた時期には、いつも井口君と相談しながら「全員野球」を目指した。試合に駆け付けてくれた選手には、たとえ代打でも代走でもいいから必ず出番を与えて頑張ってもらう。そのうえで試合にもちゃんと勝つ！

私たちは、もちろん常に勝つことを目指したが、それはけっして「勝利至上主義」ではなかった。

ひとつひとつのプレーを大切にしてチームとして全力を出し切ったけれど残念ながら負けたとき、井口君は「惜しかったなぁ！」と悔しがる一方で「シビれるイイ試合だった！」と喜びもした。それこそが私たち二人の目指したドルフィンズの「流儀」だったからだ。

また、たとえば試合前に先発投手を決めるにあたり、井口君と私とで、代わる代わる投手のボールを受け、二人で合議のうえ決定することにした。井口君が正捕手になって２年目、平成 14 年（2002 年）からのことだった。ある試合の後に、井口君がＭＬに流したメールがある。

「重要なことは、投手の選択に成功した点です。朝の投球練習で幸寺投手のコントロールがとてもよかった。これに対し、筧投手は、変化球は問題ありませんが、ストレートの縦回転が切れておらず、走りがほんの少し不足していました。実は、この投手選択を試合直前に決断した藤本代行の勝利だったと言えます。今まで、試合直前の状態をみて、先発投手

を決定したことはありません。すごいチームになったなぁと思います」

実は、私が決断したわけではない。幸いにも私と井口君の意見がいつも一致したというだけの話である。二人でブルペンにおいて協議するのは楽しい作業であった。もちろん、打順についても、当日それぞれの選手の顔を見てから決める。打順が固定されることはなく「猫の目打線」がド軍の「売り」でもあった。

せっかく参加してくれたのに、試合展開の都合で出場機会を得られなかった選手には心から詫びた。ともかく「全員野球」で勝利をつかむことこそが、私たちにとって最も大切なことだったからだ。

井口君はそんなド軍が大好きで、だからこそ、私のぎこちない采配をも大切にしてくれたのだと思う。

ただ、このような関係性も、ずっと続けられるわけではなかった。私が思っていた以上に井口君はギリギリのところにいたからだ。大好きな野球を続けるため、井口君は試合の１週間前からお酒も断って体調管理をしっかり行い、仕事もかなりセーブしていた。

そんな状況をいつまで続けられるか…と言う葛藤が井口君にはあったのだ。

最後の大阪戦

平成 22（2010）年の予選最終戦は、神戸・大阪・広島の「三つ巴」で、初戦の大阪対神戸戦は 7 回の投手戦の末、なんと１対１の引き分け。引き分けの場合のルールはジャンケンによる決定となるが、こんな場面に遭遇したことがなか

ったド軍はあえなく敗退。
　それでも２試合目の広島戦を３対１で逃げ切り、最終戦の結果を待つが、大阪が広島をくだして勝負あり。ド軍の「夏」が終わるとともに井口君にとっての全国大会予選もこれが最後となった。
　「ほんまに引退するん？」何度も聞いたけれど、井口君の答えは変わらなかった。ド軍発足２０年目、正捕手就任１０年目にしての「決意」であった。

井口君引退の余波

　井口君がドルフィンズを引退したことで、私は野球への情熱を一時的に失った。正確に言えば、ドルフィンズへの愛着を失ったのだった。私自身の勝手な感性あるいは「思い込み」の問題なので如何ともし難いのだけれど、井口君がチームを離れたことで、私の居場所もなくなってしまったと感じたのである。それだけ井口君が私を大切にしてくれていたことの証左でもあった。
　ご承知の通り、私はベンチワークが多かったこともあり、ド軍では「非戦闘員」の立場だった。参加選手が９名なら試合にも出ることになるが、１０名おれば私はひたすらベンチを守れば足りる。それでも、あらゆる雑用を私は引き受けてきた。それがチームのためであって、そうすることが同時に自分自身のアイデンティティでもあったからだ。
　井口君はそんな私のことを常に気遣い、ねぎらってくれた。何がどう…と言う説明はできないけれど、わかってくれる人の存在は大切である。たった一言でも良い。いや言葉などなくても良い。わかってくれる人の存在は、ただただ大きなエネルギーとなる。
　井口君がド軍から抜けて、私は途端にさびしくなった。まったく元気が出なくなったのである。それまでは進んで引き受けていた「雑用」が、まるで誰かから押し付けられているように感じられた。それじゃダメじゃん！
　そこでハタと気がついた。私は井口くんからエネルギーをもらい、井口君のためにこそチームの諸事万端を整えることに奔走していたのだ…と。
　前記のとおりチーム内の雰囲気については、井口君のみならず私にとっても「良好な状態」とは感じられなかった。老兵は死なずとも去るべきか…などと考えるようになっていた。まあ「使い道」のないおっさんがベンチで大きな顔をしているのも迷惑だろうなぁ…と。
　「せやから、あのとき『一緒にやめよう』って言ったやん！」と井口君は微笑んだ。最初から井口君にはわかっていたのだ。こうなることが見えていたのだろう。それでも私には、ふっ切れないものがあった。ド軍創成期からともに歩んできた筧・幸寺の両エースは健在であったし、まだまだ私が支えなければいけないという「独りよがり」の自負心・責任感もあった。
　それで、私自身が潰れてしまわぬよう少しは手を抜くことを覚えていった。グランドの確保も野球道具の管理も他の選手らに任せるようになった。そうすることで肩の力が抜けた。自分の好きなときにだけド軍の活動に参加するというスタンスに切り替えたのだ。
　その昔、妻から言われた「どうせ、あなたの出番はないから大丈夫よ」という言葉を思い出したことも私を気楽にさせ

た。そう、所詮、私は「万年補欠」なのだ。いてもいなくても大勢に影響はない。

その後、平成 23 年（2011 年）には新潟決勝大会出場、平成 24 年（2012 年）には宮崎決勝大会出場と、井口君という「大黒柱」を欠いたにもかかわらず、ド軍の躍進は続いていったが、その一方で、私の「野球離れ」も加速していくかのように思えた。

マスターズ大会の発足

井口君のいないドルフィンズにそろそろ見切りをつけたいなどと、私の心にもモヤモヤが生じかけていた平成２５（2013）年、日弁連野球連盟に「新しい風」が吹いた。

年齢おおむね43歳以上？を対象にした「マスターズ大会」の発足である。１年目こそ参加できなかったが、２年目からは井口君と私とでほぼ毎年参加するようになった。

これがまた楽しい！ 当然ながらひま・こまコンビが揃えば懇親会での替え歌が定番となるのだけれど。

替え歌の歌詞内容を見れば、マスターズ大会の楽しさはご理解いただけると思う。たとえば「北酒場（細川たかし）」の替え歌で「北ドーム」の一部をご紹介しよう。

うちの連合軍には　ランナー無視した守備が似合う
投手は投げるだけがいい　ベースに届かなくてもいい
バットを振れば拍手が起こる　チップでもファールでも
絡まる足も　ほどけぬままに　駆け出しこける
北のつどーむだけには
レジェンド　男の時代（とき）がある

（2016.11.2 作：尚&寛）

いやいや、ホントはそんなにひどい試合ではない（笑）。あくまで誇張なのだけれど。ともかく「誰もが楽しめる野球」がそこにはあった。毎年、お世話取りをいただく札幌の吉川正也先生をはじめ札幌チームの皆様には本当に感謝の言葉しか思い浮かばない。

また、井口君にとっては、他チームの「名投手」とバッテリーを組めることも一つの楽しみとなった。名古屋の鈴木秀幸投手、広島の爲末和政投手、大阪の橋田浩投手など、ふだんの試合では絶対に組めないバッテリーが札幌つどーむでは実現するのだから。

このようにバッテリーを組めたことの喜びについては、のちに爲末投手も橋田投手も、井口君との楽しい思い出としてメッセージを書いててくれている。

札幌での懇親会はいつも「三川屋」というお店で開かれるが、井口君と私は、三川屋の「舞台」に上がることを心から楽しみにしていた。ときには名曲だって生まれる。自画自賛で恐縮だが、「浪花節だよ人生は（細川たかし）」の替え歌で「野球漬けだよ人生は」である。

打てと言われて　素直に打った
投げておさえて　その気になった
若気の至りが　永年続いて
よせばいいのに　マスターズ
野球漬けだよ　みんなの　みんなの　人生は

サインは誰かが　教えてくれる

試合も誰かが　仕切ってくれる
そんな誰かに　振り廻されて
消えた選手が　またひとり
野球漬けだよ　みんなの　みんなの　人生は

咲いて萎んで　捨てられました
ついにレギュラー　諦めました
監督の情けに　つかまりながら
代打　代走　野次将軍
野球漬けだよ　みんなの　みんなの　人生は
（2018.11.23　作：尚）

ホント、こんなに楽しいマスターズ大会を２人だけで独占するテはない。井口君はドルフィンズとしてのチーム参加を強く望み、毎年、ドルフィンズ・メンバーに声を掛け続け、マスターズ参加者はポツリポツリと増えていったが、チームとしての参加は「夢のまた夢」であった。

ひまわり・こまわり再び

ところで、2015 年（平成 27 年）11 月、藤掛伸之弁護士の「還暦お祝いの会」が密かに開かれた。「密かに」というのは当の本人に対する関係であって、いわゆる「サプライズ」というやつだった。

このお祝いの会において上映するビデオの制作を「ひまわり・こまわり」によって行ったわけだが、これには結構力が入った。

実は、お祝い当日、私と井口君には既に別の予定が入って

いた。翌日に札幌の「つどーむ」でマスターズ大会が開催されるため、当日ちょうどパーティーが始まる時間帯に神戸空港からの最終便で札幌入りしなければならず、まさに「ダブルブッキング」が発生してしまったのである。もちろん、お祝いにも駆け付けたいが、残念ながら我々の身体を２つに割ることは出来ない。

そこで「欠席した場合でも、出席した以上に爪痕を残そう！」という井口君の提案で、「のぶゆき還暦！」ビデオの制作とあいなった。神戸空港でのロケや、フライトシミュレーターによる札幌千歳空港への着陸などは、井口君の構想そのままであったが、肝心のネタについては事前の打ち合わせなどないまま本番に突入。

しかし、現場でのネタ繰りやアドリブの応酬が実におもしろい。私がトチったり噛んだり、井口君がネタを忘れたり噴き出したりしながら、まさに元祖「中川家」みたいで、むしろ演じる側が楽しかった。

いちばん偉かったのは撮影係のサヨマネである。一切笑うことを許されないまま、必死にビデオカメラを回していたのだから。

ビデオ編集を完成させて、トミマネに託しておいたほか、お祝い当日には、札幌のホテルから電話中継も入れて藤掛さんのための新曲（替え歌）も披露した。**「四番の藤掛をもう一度」（いちご白書をもう一度：バンバン）**である。

いつか　君も行った　予選がまた来る
法廷を抜け出して　いそいそ出かけた
サヨナラ敗けしても　寿司を食ってた
あの日の名古屋ドーム　今は懐かしい

すでに破れかけた　あの時のグローブに
過ぎ去った昔が　あざやかに蘇る
君も来るだろうか　札幌つどーむ
四番～の藤掛を　マスターズでもう一度
四番～の藤掛を　マスターズでもう一度
（2015/11/8　作：寛　補：尚）

スペイン・ポルトガルの旅

平成 29 年（2017 年）1 月、井口君から「ポルトガルに行きませんか？」というメールが来た。なぜポルトガルなの

か、見当もつかなかったが、「ちょっとその辺で会って話をしよう」となった。会見場所は「阪急オアシス本山南店」のカフェテラスである。

正直なところ、ポルトガルを旅行先に考えたことはなかった。私自身、ポルトガルについては何も知らないというのが実情で、無知ゆえの無関心だった。

その点、井口君のポルトガルに対する思い入れはたいへん強い…ものでもなく、「ほなマチュピチュにしよか」などと言いだす始末。「いやいや、マチュピチュに登るバスが通る山道は怖いでぇ。舗装されてへんし、ガードレールもなかったと思うねんけど」と言いかけると、井口君もあっさりと撤回した。実は、私は高所恐怖症なのであるが、井口君は私と同じかそれ以上の高所恐怖症であったのだ（笑）。

それで、ポルトガルに話が戻り、どうせ行くならスペインにも行こうかと話がどんどん広がって行った。

ところが、スペインについても知識がない。地名としてはマドリード、バルセロナくらいか。そうそう「バルセロナと言えばサグラダファミリア！」という程度しか思いつかないのだ。それだけ興味がなかったと言えば、スペインに対してたいへん失礼なのだが。

で、そこからがたいへん。ちょっと調べてお互いに意見を出し合うと、まあ出るわ出るわ、行きたいところが「てんこ盛り」になってしまった。もちろん、石橋伸子さんやウチの妻の意見や希望も入ってのことだから、いろいろと膨らむのは当然である。

バルセロナのガウディ建築群はもとより、マドリードのプラド美術館、ピカソのゲルニカ、古都トレドにコルドバのメスキータ、グラナダのアルハンブラ宮殿などなど…。さらに

ポルトガルでの滞在地をポルトとリスボンの２か所に絞って、ざっと「一筆書き」の行程を作ってみたら、なんと 14 日間という「掟やぶり」の大旅行計画となった。

さすがにこんな長期の旅行は…という反対論が少なくとも私以外の３人のうち誰かから出るだろうと思っていたら、みんなあっさり「いいね！」だと。

そんなわけで、決行は同年 11 月１日と決まり、さっそく航空券・ホテルなどの予約作業に入る。

最初に押さえるべきはエアーで、しかる後にホテルを予約するのが定石である。また、今回のように「移動型」の場合、旅行先の到着空港と帰路の出発空港を別々にするのが合理的である。「オープンジョー」と呼ばれる航空券であり、今回、入口はバルセロナ空港、出口はリスボン空港として ANA のチケットを押さえた。

この時点で、１１月１日に伊丹から羽田・フランクフルトを経由して同日中にバルセロナへ到着し、１３日にリスボンからフランクフルト・羽田を経由して１４日に伊丹へと戻る行程がフィックスされた。

ここからの作業は結構楽しい。観光先や次の移動先及び移動方法との兼ね合いでホテルを選定していくのだ。

たとえば最初に到着するバルセロナの場合、次の移動先がマドリードで、新幹線（AVE）での移動を予定していたから、ホテルは新幹線出発駅に近いところが望ましい。そうすると、第一候補は駅に直結している「バルセロ・サンツ」となり、次は料金の比較が問題となる。

私は海外旅行では Bookinng.com を利用することが多いが、必ず「朝食付」の設定で、かつキャンセルが可能な宿泊コースを選ぶ。そのうえで、同じホテルの公式 WEB ページ

も検索してオリジナル料金との比較をする。たいていは Bookinng.com の設定の方がリーズナブルなのだが、たまには公式ページでディスカウントされていることもあり得るからだ。

なお「観光に便利」という要素を最優先にしてホテルを選ぶのは余りお勧めできない。観光の際は「手ぶら」であるから、多少の移動があっても負担は感じない。だが逆に、重いスーツケースを抱えて長い距離を移動するのは結構つらい。だから、移動経路をあらかじめ検討しておくことも大事なことである。駅の構内図を WEB で探したり、Google マップのストリートビューで周辺の状況を確認したりしておくこともお勧めしたい。重いスーツケースを抱えての移動を出来るだけ減らすこと、かつ、次への移動を見据えたホテル選びが肝要なのだ。

バルセロナに異変が？

出発が迫った 2017 年１０月、バルセロナが所在するカタルーニャ州において、スペインからの独立にかかわる住民投票が実施されるなど、きな臭い状況が持ち上がった。カタルーニャ州の独立問題はその歴史も長いうえに根も深く、我々に簡単に理解できるものではない。

外務省も渡航は制限しないものの、お勧めはしないという姿勢であった。私たちはどうすべきか迷った。バルセロナさえ避ければ、あとは OK のようなので、フランクフルトからマドリードへ直行することも選択肢の一つとなったが、そうするとせっかくゲットしたサクラダファミリアの「生誕のファサード」のチケットや「Roca MOO」の予約（いずれも後

述）が無駄になってしまう。
　そこで井口君からナイスな提案があった。現地の日本人ガイドをお願いすると言うものだった。私たちにとって不足しがちなリアルタイムの現地情報と危機時における言語的な不安を一挙解消できる名案であった。
　井口君の選定で「カスミさん」という日本人ガイドさんをお願いすることになった。カスミさんによると、現地は警察や軍の警備がかなり厳しくなったが、そのぶん逆に治安状況が良いとのこと。少しは安心してバルセロナ観光を楽しめそうだ。
　さて、バルセロ・サンツでのチェックインの一コマ。私は「スペインは英語が通じにくい」と聞いていたので、ホテルのフロントで「一夜漬け」のスペイン語を駆使してチェックインの手続をした。私がスペイン語で話しかけたものだから、相手のフロント嬢も当然のようにスペイン語で返してくる。これが一部の単語しかわからない。それでも何とか切り抜けて、井口君の番になったら、彼は英語で話しかけ、フロント嬢も普通にすらすら英語で答えるではないか。え～！ 話がちがうやん！
　たしかに、それ以降、英語での意思疎通が困難な場面も幾つかあったが、多くは英語で何とかなった。スペイン語の単語や短いフレーズなどを色々と覚えたことは、それはそれで楽しかったけれど、多用したフレーズはタクシーで降りるときに使う「ウン・レシーボ・ポルファボーレ（レシートください）」くらいだった（笑）。

サグラダファミリア

　いまや何でもNET 予約である。海の向こうの施設見学をポチっと予約できるのだから、このうえなく便利でありがたいことだが、逆にプレッシャーもある。その昔、映画（及び小説）の「ダビンチ・コード」が大ヒットした年にイタリア・ミラノにて「最後の晩餐」を見に行こうと考えてNET 検索したら、すでに予約が完売となっていたという苦い経験があるからだ。ミラノに滞在中、諦めきれずにサンタ・マリア・デッレ・グラツィエ教会に直接赴き「当日券ありませんか」などと尋ねてみたが、冷たくあしらわれて終わった（涙）。
　そんなわけで、まずはNET 予約の開始日と開始時間（時差も勘案して）をチェックすることから作業が始まる。公式予約サイトをのぞいてみると、最長で３か月前くらいから予約が出来そうだったが、必ずしも予約開始が一定していないようなので、時々予約サイトに行ってみては、１１月２日の予約がいつ出来るかを確認する必要があった。最終的に予約が出来たのは９月６日のことだったが、それまでは結構ドキドキした。
　ちなみに、サグラダファミリアには、「生誕のファサード」と「受難のファサード」の２つのエレベーターがある。ただ、「生誕…」の方は雨天の場合、吹き込んだ雨で階段が滑って危険なため入場が中止・制限される旨の情報があった。それなら「受難…」を予約した方が安心かとも考えたが、実は世界遺産は「生誕…」の方だけであることが判明したので、ここは一かバか「お天気」に賭けることとした。
　さて、１１月２日の朝、ホテルまでカスミさんが迎えに来てくれた。サグラダファミリアまでは地下鉄一本で直行できるとのこと。駅の階段を上っていくと「受難のファサード」が出迎えてくれた。サグラダファミリアの周りを半周する格

好で「生誕のファサード」へ。
　ここが「正面」なのだろう。朝９時前というのにサグラダファミリアの前はたくさんの観光客であふれかえっている。入場チケットは完全予約制。私たちはアサイチの９：15 で予約していた。
　生誕のファサードのエントランスを入ると、堂内はまさに「森林」の様相を呈している。ひたすら見上げてしまう高い柱と天井がまるで生命を宿しているかのように感じられるのだ。エントランスのすぐそばに小ぶりのエレベーターがある。係員を除くと２～３名くらいしか乗れない。これで生誕のファサードの約 50m上階まで登るのだ。渡り廊下を通って隣の塔の方へと移り、あとはひたすら螺旋階段を降りて行くことになる
　この螺旋階段がまたいろいろな意味ですごい。当初は搭の周囲を回りながら降りる感じだが、「生誕の…」は世界遺産のはずなのに「落書き」がひどい。心無い人は世界中にいるんだなぁ…と実感。この階段の所々に縦長の窓が開いており雨天の場合は雨が吹き込む。雨で階段が滑って危険なため入場が中止・制限されることがある…との情報にも納得がいく。
　お天気に恵まれたことを心から感謝した。
　さて、この螺旋階段は、途中から本当に「巻貝」の中を降りて行くみたいになる。この巻貝の中心部は下の方までず～っと「丸見え」なので高所恐怖症にとってはちょっと、いやずいぶんと辛い。
　高所恐怖症の私は、この「渦の中」を極力見ないようにして歩を進めた。井口君はと言えば、何かの拍子に「渦の中」を覗いてしまったようで、その場に腰を落として、少し躊躇するようなそぶりを見せていた。

　いや～、その気持ちわかるなぁ。足の力がすっと抜けちゃったんだよねぇ。まさに同病相哀れむの心境。

　そんなこんなで、我々は無事に地上に降り立ち、美しい堂内をあらためて堪能したのであった。
　ガウディは謎の多い人物で私もよくは知らないが、それにしてもこんなに心を揺さぶられる建物は初めてのことだ。
　「馬には乗ってみよ、人には添うてみよ」と言うではないか。さしずめ「建物は登ってみよ！」が正解なんだろう。
　さて、次頁の写真は、カスミさんが外から写してくれた、貴重な私の「お気に入り」である。

Roca MOO（ロカ・モー）

2015 年に「世界のベストレストラン 50」の 1 位に輝いた「エル・セジェール・デ・カン・ロカ」が監修するミシュラン 1 つ星のレストラン「Roca MOO（ロカ・モー）」がバルセロナにある。いわば世界一のレストランの姉妹店だ。

グルメに疎い私にはまったくわからない分野であるが、そこは石橋伸子さんのリクエスト。あだやおろそかかにもできず、９月６日、Roca MOO に予約メールを送った。

すると、間髪を入れずに「４名様をウェイティング・リストに登録しました。希望日に空席があれば、予約チームができるだけ早くご連絡し、クレジットカード等の詳細をお尋ねします」との返事が来た。これはどうやら自動返信なので、あとは予約チームからの連絡を待つのみと理解したが、待てど暮らせど、さらなる連絡が来ない。さすがに「世界一」はハードルが高く空席がないのか…と半分あきらめつつも「返信メールが届いてから２週間ほど経ちます。１１月２日の午後１時３０分に４人で予約できますか？ メッセージをお待ちしています」と再度メールを送ったら、あっさり「ご予約が確認されました。次回以降は順番待ちリストを介さずに直接ご予約いただけます。よろしくお願いします」と嬉しい返事が来た。どうやら予約チームが連絡を忘れていただけのことで、「忘れてましてん。すんません」という雰囲気が漂うメールであった。このあたり、やっぱり明るく陽気なラテン系なんですなぁ。

しかも、ドタキャン時のキャンセル料を確保するため、通常は予約客にクレジットカード番号を登録させるシステムのところ、その手続はスルーされた。ふむふむ日本人は信用さ

れているのだな…と勝手に善解（笑）。
　ちなみにメールのやりとりはスペイン語であるが、Google 翻訳で読んだり書いたりが十分に可能であるのでたいへんありがたい。ただ、ニュアンスが伝わるのかどうか自信がないときは、スペイン語から英語への翻訳をはさんで、さらに日本語に翻訳したらどうなるかとか、日本語から英語を経てスペイン語に翻訳するパターンなども試してみると、納得できると思う。知らんけど。
　さて、Roca MOO の食事は申し分なかった。たしかに「世界一のレストランの姉妹店」というキャッチフレーズもうなずける。お値段（50 ユーロ/１人）はランチとしては高い方かも知れないけれど、お料理の内容としてはディナー並みの質と量であったから、私にはたいへんリーズナブルなものと感じられた。
　ただ、真昼間からワインを頼んだことで、お値段がちょっぴり跳ね上がった。メンバーにカスミさんを加えた５人で美味しいワインを２本空けちゃったからだ。まさに「旺食尽酒」（おうしょくじんしゅ）の為せるわざであった。
　なお、このあとは、毎晩４人でワイン２本をあけるのがデフォルト（定番）となったが、「旺食尽酒」の旅をリーズナブルに続けるため、まずはお店の「ハウスワイン」を尋ねて、まずはそれを飲んでみることにした。そしていずれの地でも「ハウスワイン」は概ね安くて旨いことが実感された。
　毎晩、結構飲んだり食べたりしたが、飲食料金は４人で100 ユーロを切ることも珍しくなかった。スペイン・ポルトガルは、「旺食尽酒」たる我々にとって、本当に嬉しい旅行先なのである。

レンフェ（Renfe）の旅

　レンフェ（Renfe）とはスペイン国鉄のことである。私たちは、まずバルセロナ～マドリード間をレンフェの新幹線（AVE）で移動した。
　予約したのが私たちには嬉しい座席で、４人掛けの椅子の真ん中にテーブル（Messa）がしつらえてある。４人が向かい合って座り、テーブル上には当然ながら買い込んだワインとおつまみが並ぶのだ（笑）。
　この座席は１人でも４人でも料金が同じである。４人で乗るのが最も「お得」であることは言うまでもない。ちなみに、この座席は１つの車両ごとに２セットしかないようだ。早く予約した者勝ちということね。
　それにしても楽しい。旅の醍醐味はただの移動でなく、仲良く語らいながら、景色を堪能しながら、そして美酒に酔いながら…が素敵なのだという事実をあらためて感じた次第。

スペイン・ポルトガルの思い出

　バルセロナの話ばかりになったが、この調子でマドリード、トレド、コルドバ、グラナダ、ミハス、マラガ、ポルト、リスボン…と書き続けていくと、それだけで１冊の本になりそうなので、別の機会に書き直さないといけない…とも思ってしまう。
　マドリードでは美術館巡りを楽しんだ。世界三大美術館の一つとされるプラド美術館やソフィア王妃芸術センター、ティッセン・ボルネミッサ美術館などをはしごしたが、とりわけピカソのゲルニカに出会えたのは素晴らしかった。目の前

の大きな原画の迫力に圧倒され、４人ともしばらく身動きすらできなかった。
　グラナダでは、アルハンブラ宮殿を堪能し、居酒屋ではビール一杯に一皿ついてくるタパスや、シェリー酒を無理やり？サービスしてもらって楽しんだ。お昼は井口君の提案で河岸を変えて「ランチ・アゲイン」するほどの楽しみようであった。夜は「洞窟のフラメンコ」の躍動感に驚くとともに、アルハンブラ宮殿のライトアップに感じ入った。ここで事故が発生。井口君から私にパスされたカメラを落としてしまうハプニングだ。私はＧＳサブ球場での落球事件をとっさに思い出した（スコアは「6-Ｅ４」）が、今回は両者のエラーと言うことでスコアは「６Ｅ－Ｅ４」ということで落ち着いた（笑）。
　翌日、マラガで買ったカメラはデフォルトがスペイン語の表示で笑ってしまったが、むしろ当然のこと（笑）。また、グラナダに引き続いてフラメンコのお店に行き、酔った私の妻が調子に乗って踊り出し、井口・石橋のお二人が笑い転げた一幕もあった。
　ポルトでは空港からの地下鉄でスリのおっさんに井口君が狙われた。お尻を触りにきたように見えたので、最初は痴漢か（笑）と思ったが、井口君の財布はチェーンでつながれており無事にスリを撃退した。ポルトの夜は「ファド」（ポルトガルの民族歌謡）の風格ある響きに酔ったが、お店の心づくしのワインを「ハウスワインですか？」と聞いた井口君に店主が泣き出す（ウソ泣きであったが）というシーンもあって、たいへん愉快な夜であった。
　リスボンでは、サンタジェスタのエレベーターで眺望を楽しもう…というのに、高所恐怖症が足を引っ張る。エレベー

ターは屋上まででではなく、１階下までしか行かない。あとの１階分は螺旋階段を上らなくては行けないのだ。この階段がまた頼りない鉄製のもので、約４０メートル眼下の街並みが足元に迫ってくる感じに見える。私はここでもエイヤ～と階段を上ったが、井口君はそうも行かず、眺望をあきらめたのだった。同じ高所恐怖症ではあっても、ちょっとニュアンスが違うのかも。ウチの場合は高いところ大好きのＳ妻がM夫の尻を叩いて追い立てるのであるから、イヤでも上らざるを得なかっただけのこと。過去にもこんなことは数限りなくあったのよ。降りるときはもっと怖いのだけれど。
　リスボン最後の朝、ホテルの前の広場から出る空港バスに乗ったが、井口君の背中が「帰りたくない」と訴えていた（笑）。その気持ちは私も同じだった。それでも、リスボン-フランクフルト-羽田-伊丹と、日本を目指す飛行機は容赦なく飛ぶのであった。
　旅が終わっても思い出は尽きない。私たちの心にいつまでも生き続けるだろう。こんなに楽しい旅は、あとにも先にもきっともうあり得ない。「サグラダファミリアが完成したときに、また一緒に行こう！」との約束を私たちは忘れず、ずっとずっとその日がくるのを待ち続けることだろう。

マスターズにチームで参加！

　ド軍でマスターズにチーム参加したいという井口君の思いは、令和元（2019 年）にようやくかなうことになる。
　揃ったメンバーはぴったり９名（井口寛司、藤本尚道、松本隆行、藤掛伸之、幸寺覚、吉田裕樹、村上英樹、髙本直彰、艸場傑）である。おや？と思われたあなたはきっと正しい。

最年少の艸場選手はこの時２０代、何故にマスターズ参加が可能だったのか？ それは、「チーム参加の場合に限り若年者の加入可」という特別ルールによる。

ド軍がチーム参加できたと言っても、９名だけで２試合を戦うのは余りに厳しい。大阪・京都などからの個人参加選手を加えて「西日本チーム」として戦うことになった。

初戦の相手は札幌チームである。強敵が相手であるが、それでもせめて１イニングくらいはド軍だけで存分に戦わせて欲しい。この希望はかなえられ、１９年ぶりに幸寺ー藤掛のバッテリーも復活した。藤掛選手の打順はもちろん四番である。まさに「四番の藤掛をマスターズでもう一度」が実現したのである。

しかし、さすが札幌、１回の表に５点をもぎ取る攻撃でド軍もタジタジ。ともかく札幌の１番バッターは俊足であった。ボテボテのサードゴロを捕球して１塁に投げた刹那、もうランナーがファーストに到達しているのだから。え？ これってマスターズだよね。う～む、「チーム参加の場合に限り若年者の加入可」という特別ルールを最も理解しているのは札幌チームだったのか。

しかし１回のウラにド軍の打線が爆発、打者一巡の猛攻である。四番に据えた藤掛もきっちり首位打者ばりの活躍。私としてはあくまで「洒落」のつもりだったが、ド軍にとっては夢が膨らむ素晴らしい布陣となった。私の打順は９番だったが、８番のマッちゃんがスコーンとヒットを放つもんだから、私も負けてはおれない。ブンとバットを振り回したらボールがセンター前に飛んだ。もう全員出塁の状況となり、１番艸場に打順が戻る。艸場のレフト方向へのライナーを見ながら、レフトの頭上は超えたと判断して二塁ベースを回った

ら、審判が手をグルグル回している。おお、柵越えＨＲなんだ！ マスターズでのＨＲは初で、まさに大会第１号。この回の攻撃で一気に９点を叩き出しド軍が札幌を大逆転。

「今日は神戸に勝ちに行く予定だった」とおっしゃる吉川先生にはたいへん申し訳なかったが、これも一つの「ご恩返し」とばかりに攻守の手を緩めることなく、最後までリードを守り切った。

その反動か、次の東京戦は、けちょんけちょんにやられた記憶なので詳しいレポートはパス。

その夜の懇親会（三川屋）は、もちろんひま・こまコンビの替え歌で盛り上がったことをお伝えしておく。２人で３曲を熱唱したが、そのうちの１曲**「三川屋」（居酒屋/五木ひろし＆木の実ナナ）**をご紹介しておこう。

（井口）
　もしも　嫌いじゃ　なかったら
　何か　ひとこと　言ってくれ
（藤本）
　そうね　今年の　「つどーむ」は
　チームで　来られて　よかったわ
（井口）
　打率　聞く程　ヤボじゃない
　まして　エラーの　話など
（藤本）
　そうね 今年も　三川屋で
　替え歌　唄う　だけだもの
（二人で）
　絵もある　「花」もある

歌もある　語る言葉も
洒落もある　そんな「三川屋」で
（井口）
外に　出たなら　雪だろう
さっき　粉雪　舞っていた
（藤本）
いいわ　止むまで　ここに居て
次の替え歌　作るから
（井口）
それじゃ　オイラも　付き合うか
誰を　テーマに　作ろうか
（藤本）
それは　今度の　お楽しみ
今日は　とっとと　帰りましょ
（二人で）
絵もある　「花」もある
歌もある　語る言葉も
洒落もある　そんな「三川屋」で
（2019/11/12　作：尚）

なお、マスターズ大会は、現時点では 2019（令和 2）年の大会を最後に、つどーむの改修工事及び引き続いてのコロナ禍による「休会」が続いていた。しかし、札幌の吉川先生、横浜の瀬古先生から頂戴した情報では、今年（2023 年）の１１月にはマスターズ大会が復活するそうである。

懐かしい「つどーむ」、懐かしい「三川屋」。井口君のいない「三川屋」の舞台で私は独りで替え歌を歌えるのだろうか。

考えただけでも、涙が…止まらない。

あとがき

井口君の 1 周忌くらいまでには、この本を仕上げようと思っておりましたが、2023 年 1 月２０日に「井口寛司選手を偲ぶ会」が神戸ドルフィンズ主催により開催されることになりましたので、急遽、その日程に合わせようと、がぜん奮闘してしまいました（誤字脱字ご勘弁を）。

並行して「偲ぶ会」のパンフレット制作も行った関係上、この本の記載をパンフの記事として転載したり、また逆もあったりして、両者に重なる部分があることをご容赦ください。

あるいは、パンフでは当たらずさわらずのことを書いておきながら、こちらの本では「そこまで言うんかい！」というような記述があるかも知れません。いずれにしましても関係者のみなさまに対するリスペクトが大前提であり、けっして他意はございませんので、どうぞお叱りのございませんようによろしくお願いいたします（笑）。

ところで、前頁の写真をご覧になって、私が井口君から「折檻」を受けていると思われたあなた、それは大きな誤解です。この写真は河野キャプテンが深江野球場で撮影したものですが、河野君は「いったい何のプレーですかぁ？」と首をかしげていましたけれど。

正解は、井口君はマッサージの名手でもあり、ガチガチに凝り固まった私の肩こりをほぐしてくれているのです。そりゃ、痛いですよぉ～！ しかし井口君の愛がこもったマッサージですからね。このときだけ井口鬼軍曹と藤本二等兵の関係に戻っていると、言えないこともありませんが…。

最後までお読みいただき、本当にありがとうございました。

（2023 年 1 月 20 日　藤本尚道）

井口寛司弁護士は、昭和３７年和歌山県日高川町に生まれ、昭和６０年中央大学法学部法律学科を卒業し、昭和６１年には司法試験合格。昭和６２年第４１期司法修習生となり、平成元年神戸弁護士会（現・兵庫県弁護士会）に入会。

平成６年には井口法律事務所を開設し、井口・石橋法律事務所、神戸シティ法律事務所へと名称変更を経て、平成１６年に初代代表社員として弁護士法人神戸シティ法律事務所を設立。

当会では司法修習委員会委員長及び法科大学院委員会委員長等を歴任したほか、甲南大学法科大学院の実務家教員を務めるなど、後進の指導にも力を注いだ。

令和４年７月３日逝去（享年６０歳）。

（2015年10月27日撮影）